私立大学 学生生活白書　2015

発　行　平成27年9月
編集者　学生委員会学生生活実態調査分科会　分科会長　北條英勝
監修者　一般社団法人日本私立大学連盟
　　学生委員会　担当理事　吉岡知哉
　　委員長　　國廣敏文
〒102-0073　東京都千代田区九段北4-2-25　私学会館別館
TEL 03-3262-3603　FAX 03-3262-3604（教学支援担当）
URL www.shidairen.or.jp

企画・制作協力・印刷／株式会社WAVE
TEL 本社 06-6362-1222 ／東京支社 03-6226-6151
URL www.waveltd.co.jp

STUDENT
LIFE
REPORT

私立大学
学生生活白書 2015

- 進学目的・理由／充実度／期待
- 経済
- ライフ（大学生活）
- 正課教育
- 正課外活動
- 留学
- 不安・悩み
- 進路・就職
- 身についたこと

一般社団法人日本私立大学連盟 学生委員会

STUDENT LIFE REPORT 2015

私立大学 学生生活白書 2015

まえがき

日本私立大学連盟の学生委員会が平成26年10月に実施した「第14回学生生活実態調査」の分析結果として『私立大学学生生活白書2015』を、ここにお届けいたします。

本書の分析に用いた『第14回学生生活実態調査』は、前回の「第13回調査」（平成22年10月実施）以降の変化の把握を重視しつつも、時代の趨勢をふまえて調査項目を見直し、朝食の摂取状況や留学経験の有無等の新たな質問項目を加えることで、合計62の質問項目を設定しました。調査の実施にあたっては、各加盟大学のご協力を得て、加盟120大学、6,791人の学生諸君から貴重な回答（回収率64.2%）をいただくことができました。各加盟大学へはすでに集計報告書（「第14回学生生活実態調査集計報告書」）をお届けしておりますが、本書は、加盟大学の学生諸君の学生生活の実態に関する分析結果を、今回調査を含む3回分（8年間）の時系列比較を中心にとりまとめたものです。また、冒頭には、①「留学」と学生生活の関係、②「朝食」と学生生活の関係、③身についた力・身につけたい力の推移について、特集ページを設けました。

今回の調査結果の主な特徴としては、大学での勉学に対する真摯な姿勢や意識・意欲の向上、学部・学科への満足度や学生生活の充実度の漸増、正課教育に対する満足度の向上、正課外活動への参加者の増加などが挙げられます。これらの結果から、大学での真摯な学びや課外活動への参加が学生生活の満足度を高め、学生の成長を促していることが読み取れます。その一方で、学生の留学への興味・関心は低くないものの、語学力が身についたと感じている学生が少ないことと、留学には経済面での障壁があることも課題として浮かびあがってきました。また、奨学金受給者と受給額は増加し、返還の必要のない奨学金を望む声も多いことから言えば、奨学金制度の整備・改善等、大学での学びを継続するための経済面での支援は引き続き現在的な課題であると言えましょう。

今後も、大学を取り巻く環境はますます変化し、それにともなって学生の多様化がさらに進んでいくものと考えられます。そのような状況の中、本書から学生の生活実態とニーズとを的確に把握し、学生支援の課題をご検討いただくことで、各加盟大学がよりきめ細かな学習支援・学生生活支援をおこなう上でご活用いただければ幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた各加盟大学の教職員ならびに学生諸君に改めて厚く御礼申し上げます。また、調査の実施や分析に当たられた学生委員会および学生生活実態調査分科会の委員の皆様方に心より感謝を申し上げます。

平成27年9月

学生生活実態調査分科会
分科会長 北條 英勝

各章まとめ・総括

進学目的・理由／充実度／期待 I

学部・学科への満足度、
学生生活の充実度は漸増。

経　済 II

奨学金の受給率、受給額は増加傾向にあり、
返還の必要のない奨学金への要望が高い。

ライフ（大学生活） III

学習に対する真摯な姿勢が向上。

正課教育 IV

「より分かりやすい講義」が今後の課題。

正課外活動 V

課外活動参加者は7割を超え、
ますます盛んに。

留　学 VI

留学経験者の数は少ないものの、
留学への興味・関心は低くない。

不安・悩み VII

不安や悩みの内容として就職や学業が
多く挙がるものの、
大学の窓口が十分に活用されていない。

進路・就職 VIII

「就職できるかどうか」についての不安は軟化。
次なる課題は就職先決定後のサポートか。

身についたこと IX

多くの力は身についたと感じているが、
語学力に課題。

総括

一般に景気の持ち直し傾向、就職氷河期に対する薄明かり傾向が語られていますが、就職活動は依然激戦であるため、1年生の段階から就職に対する意識は大変高くなってきています。これを反映してか学生の学習に対する真摯な姿勢や意識・意欲の向上も見られます。正課教育の満足度は向上しており、これは大学側の不断の努力のたまものだといえそうです。

今回の調査では、「留学」と学生生活の関係、「朝食」と学生生活の関係についても明らかになりました。学生生活の充実感に対しては、正課教育以外の友人とのかかわりや自分の居場所の確保などが強く関与している様子も見ることができました。これは、学生が大学に求めるものが変化していることの表れといえます。

今後はこれらの動き、ニーズにいかに細かく敏感に対応していくかが、大学に求められていくと考えられます。

特集① 「留学」と学生生活の関係

留学経験者は、学生生活の充実度・満足度が高い。

見聞や視野を広げるという意識の高い留学経験者。その数はまだ全体の8.3%である。
一方、「留学は考えていない」者は全体の47.3%に上る。
その壁は「経済面」と「語学力」が中心であり、
大学側のフォローが求められている。

留学経験のある学生は8.3%であり、全体から見ればまだ少数派である。留学経験のない者と比べ彼らの特徴としては以下の事柄が挙げられる。

まず、学習に対する目的意識が高く留学を終えた達成感が強いからか、「学生生活の充実度」と「所属学部・学科の満足度」は共に高い（それぞれ8.4ポイント差、5.0ポイント差）。

男女別で見ると、男性のうち、留学経験がある学生の割合は5.5%に対し、女性は11.4%であり、約2倍の差がある。これは、語学系留学が多いであろう人文科学系の学部に、女性が多いことが要因の1つと思われる（人文科学系に占める女性比率は67.4%）。

また留学経験のある学生には大学選択の理由として「留学制度や海外研修プログラムの充実」を挙げる者が多く（21.0ポイント差）、大学入学前から留学や海外研修を見据えていたことが分かる。

履修登録時の重視要因としては「視野が広がる」「知的刺激がある」が高く（それぞれ5.5ポイント差、7.6ポイント差）、教養志向が比較的強い。

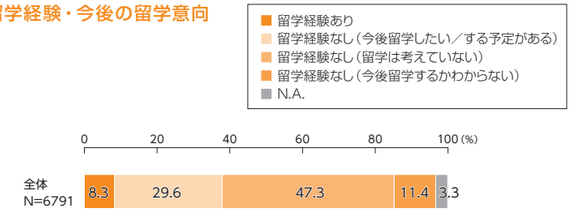
卒業後、民間企業・団体に勤める場合に求めるポイントとしては「グローバルな事業展開をしているところ」が高く（20.9ポイント差）、語学も含めた留学経験を社会人生活に役立てたいという気持ちが強い。

また経済状況に余裕のある割合が高く（7.8ポイント差）、これは留学を考えていない学生の約半数が「留学資金がない」ことを理由に挙げていることとも符合する。

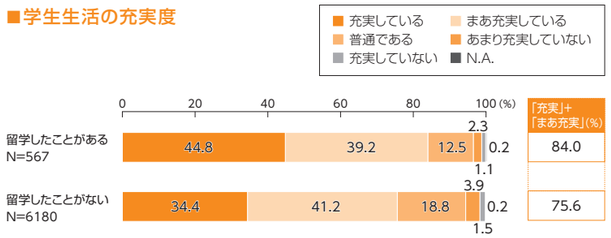
留学を考えない者の障壁になっているのは、先述した経済面の問題（48.8%）と、語学力（38.7%）である。

大企業での英語の社内共用語化など、加速するグローバル化の現状を鑑みると、留学奨学金の充実、語学教育プログラム等を含めた大学側の施策が求められるといえる。

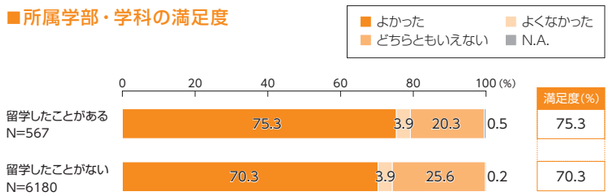
■留学経験・今後の留学意向



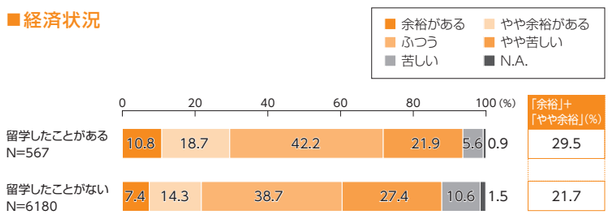
■学生生活の充実度



■所属学部・学科の満足度



■経済状況



特集② 「朝食」と学生生活の関係

朝食を食べる生活習慣が、より充実した大学生活につながる。

今回の調査では、「朝食の摂取状況」に関する設問を新たに追加した。
朝食の摂取と学生生活の間にはどのような関係があるのか。
「学生生活の充実度」をはじめとする各設問について、
「朝食を毎日とっている」層と「朝食をとらない」層で比較してみた。

全体の回答者6,791名のうち、「朝食を毎日とる」と回答したのは60.7%、一方「朝食をとらない」と回答したのは8.8%であった。朝食をとらない学生に比べ、朝食を毎日とる学生たちの特徴は以下の通りである。

「朝食を毎日とる」学生は「学生生活の充実度」が高く（5.2ポイント差）、「所属学部・学科の満足度」についても高い（6.5ポイント差）。

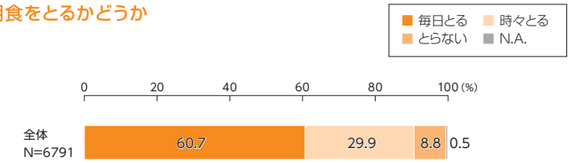
正課教育について見ると、履修登録時の重視要因として「教養が身につく」「知的刺激がある」が高く（それぞれ5.2ポイント差、5.7ポイント差）、「単位認定が緩やか」「卒業単位数を満たすため」が低い（それぞれ6.5ポイント差、6.4ポイント差）。また講義への希望については「板書やプレゼンテーションを工夫してほしい」が高く（6.1ポイント差）、「出欠のチェックをしないでほしい」「単位認定を緩やかにしてほしい」が低い（それぞれ6.0ポイント差、10.6ポイント差）。「朝食を毎日とる」層の方が意欲的に学ぶ姿勢が見てとれる。

また、「朝食を毎日とる」学生には、課外活動に「積極的に参加している」と回答する者が多く（7.0ポイント差）、さらに授業との両立ができている割合も高い（11.5ポイント差）。「朝食を毎日とる」層の方が、学外での活動も含めて積極的かつ充実した学生生活を送っている様子がうかがえる。

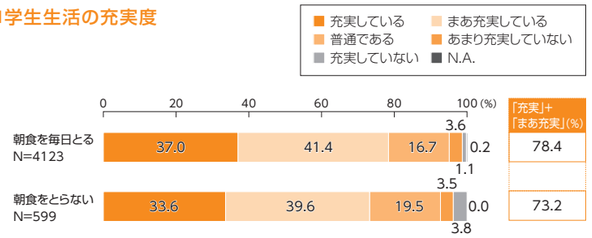
生活習慣については、「朝食をとらない」層との間で就寝時刻に大きな違いが見られる。就寝時刻が深夜1時以降の学生の割合が、「朝食を毎日とる」層が22.6%に対し、「とらない」層は54.5%と、「朝食を毎日とる」層では夜型の生活をしている者が少ないことが分かる。

朝食を食べる生活習慣を身につけることと、有意義な学生生活の間には相関関係があると思われる。

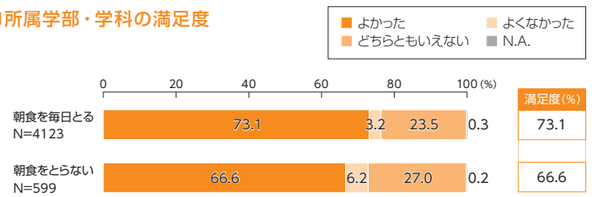
■朝食をとるかどうか



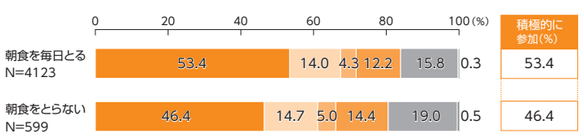
■学生生活の充実度



■所属学部・学科の満足度



■課外活動への参加



特集③ 身についた力・身につけたい力の推移

「リーダーシップ」と「語学力」修得のサポートが今後の課題か。

「学生生活でこれまで身についたと実感できる力」「今後学生生活で身につけたい力」をそれぞれグラフの横軸・縦軸にとり、プロット図を作成した。1年生と4年生を比較すると、下記のような違いが見られる。

【1年生】表現力や語学力の修得意欲が高い。一方で生活を楽しむ力は既に身についているという認識。

1年生10月時点の結果はグローバル時代を背景としてか、身につけたい力に関しては①「語学力」、また学生生活にも社会生活にも必要な⑤「自己表現力」がかなり突出しており、また、高等教育を受ける者として必要な④「論理的思考力」や⑦「リーダーシップ」を身につけたいとする学生の割合が高い。一方、半年の学生生活ではあるが⑧「生活を楽しむ力」は備わっているようだ。また、②「IT能力」についても、既にある程度身についていると考えているようだ。

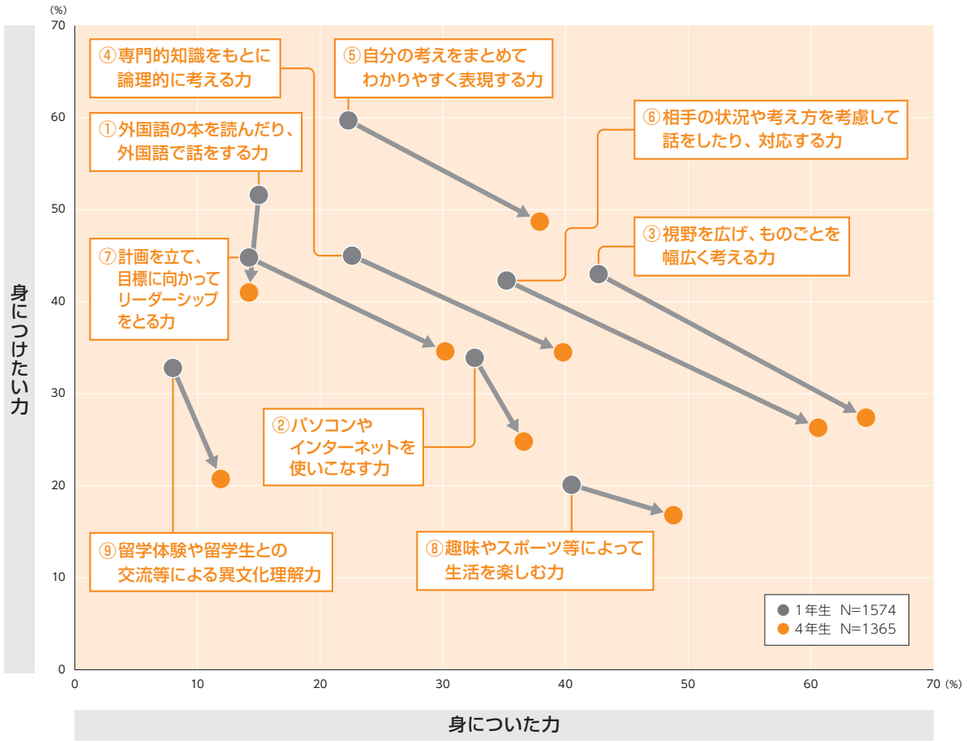
【4年生】身についたと感じている力は多いが、異文化理解力については1年生と同様達成度が低い。

就職活動が峠をこえつつある4年生について見ると、社会人としての活動を意識してか、⑤「自己表現力」に注力したいという者が目立つ。①「語学力」への関心も高い。身についた力としては1年生と同様に、⑧「生活を楽しむ力」以外に、③「幅広く考える能力」⑥「対応力」を挙げる者が多い。一方②「IT能力」は、学習内容の深化に伴いより高度なリテラシーが必要と感じるのか、1年生と比べた伸び幅は小さい。

同一人物の1年生、4年生の時点での比較ではないので、参考比較ではあるが、多くの項目が「身についた」方向に移っているのは各大学の努力の賜物である。唯一、①「語学力」に関しては横軸で若干減少（左）方向に移っているのが特徴的である。大学における語学教育には、課題が多いということの表れと見ることもできる。

高等教育を受ける者として必要な④「論理的思考力」は身についたとする者は比較的多いが、⑤「自己表現力」の養成は社会に送り出す側として、一層の強化が望まれるところだ。また、⑦「リーダーシップ」について、身につけたいという要望は大きいものの達成度が低い。正課教育以外の課外活動も含めた対応が望まれるところだろう。

■身についた力・身につけたい力（1・4年）



目次

まえがき …… 1
各章まとめ・総括 …… 2
特集 …… 3
目次 …… 6
調査概要 …… 7
基本事項 …… 8
Ⅰ章　進学目的・理由/充実度/期待 …… 9
Ⅱ章　経済 …… 13
Ⅲ章　ライフ（大学生活） …… 19
Ⅳ章　正課教育 …… 25
Ⅴ章　正課外活動 …… 29
Ⅵ章　留学 …… 35
Ⅶ章　不安・悩み …… 37
Ⅷ章　進路・就職 …… 41
Ⅸ章　身についたこと …… 45
委員名簿 …… 49
一般社団法人日本私立大学連盟加盟大学一覧 …… 50

Contents

調査概要

●調査の目的

本連盟の「学生生活実態調査」は、加盟大学に在籍する学部学生の生活状況等を調査し、学生の生活実態を把握するとともに、時代の変化に応じた比較分析を行い、加盟大学並びに連盟の諸活動を検討する際の基礎的資料とすることを目的として、4年に1度実施している。

●調査の基本設計・調査項目

質問項目の基本的な設計にあたっては、調査の継続性を重視し、客観的で数値化できる内容設定によって経年変化の比較分析を重視しつつも、時代の趨勢を踏まえた見直しを行い、「基本事項」「大学等の選択理由、入学後の満足度、大学への期待・要望」「経済」「ライフ（大学生活）」「正課教育」「正課外活動」「留学」「不安・悩み」「進路」の9分野の質問群として質問項目を設定した。

●調査対象

調査の対象学部は、平成25年度に設置されている学部（平成26年度新設学部は除く）とし、現在、同設置学部に在籍している学生（留学生を含む）を調査の対象とした。

加盟大学への調査票配付依頼枚数は、同設置学部の学部学生数（平成25年5月1日現在）の約1%の学生数を算出した（1%の学生数が10人以下の学部は、一定サンプル数を確保するため10人とした）。

●調査方法

加盟大学には、集計結果の客観性を高めるために、調査対象者（学部学生）の抽出にはできる限り厳密な無作為抽出を依頼した。各加盟大学では学部学生への調査票の配付・回収にあたって、①手渡し後後日持参、②郵送後後日持参または郵送、③指定日時に参集・回答、のような方法がとられた。

●調査の実施時期

調査実施期間：平成26（2014）年9月上旬～10月下旬（9月1日付調査依頼）

●集計結果

集計にあたっては、単純集計およびクロス集計を行い、「第14回学生生活実態調査集計報告書」〔2015（平成27）年3月〕をとりまとめた。

なお、今回から金額、時間（「Ⅱ章 経済」「Ⅲ章 ライフ（大学生活）」関係）に関する平均算出方法を変更したため、当該部分については過去2回の調査結果についても新たに集計し直した。

専攻分野別学部系統分類

専攻分野	学部名			
人文科学系	異文化コミュニケーション学部 外国語学部 グローバル教養学部 グローバル・コミュニケーション学部 グローバル地域文化学部 現代心理学部	国際英語学部 国際人文学部 国際文化学部 神学部 神道文化学部 人文学部	人文科学部 心理学部 心理こども学部 人間学部 人間関係学部 表象文化学部	仏教学部 文学部 文化学部 文化構想学部 文芸学部
法律・政治・社会系	アジア太平洋学部 環境社会学部 環境情報学部 観光学部 企業情報学部 現代社会学部 現代日本社会学部 現代福祉学部	現代法学部 公益学部 国際観光学部 国際社会学部 国際政治経済学部 コミュニケーション学部 コミュニティ福祉学部 産業社会学部	社会イノベーション学部 社会学部 社会科学部 社会情報学部 社会福祉学部 政経学部 政策学部 政治経済学部	総合政策学部 地域政策学部 人間健康福祉学部 人間社会学部 人間福祉学部 福祉総合学部 法学部
商・経済・経営系	グローバルビジネス学部 経営学部 経営情報学部 経済学部 経済科学部 経済経営学部	経済情報学部 現代経営学部 現代ビジネス学部 国際経営学部 サービス経営学部 サービス産業学部	商学部 情報学部 総合経営学部 ネットワーク情報学部 マネジメント学部 マネジメント創造学部	流通学部 流通科学部 流通情報学部
理・工系	化学生命工学部 環境学部 環境都市工学部 基盤工学部 芸術工学部	工学部 産業工学部 情報科学部 情報通信学部 生産工学部	生物学部 生物理工学部 生命科学部 総合生命科学部 創造理工学部	デザイン工学部 フロンティアサイエンス学部 理学部 理工学部
医・歯・薬系	医学部	歯学部	薬学部	

※第13回調査では、医学部・歯学部をまとめて「医・歯系」としていたが、第14回調査では薬学部を含め「医・歯・薬系」とした。専攻分野別集計においては、上記以外の学部に所属する学生の回答結果は反映されていない。

基本事項（　）内は2010年、2006年調査値

1 性別はどちらですか。

男性：**51.8%**（51.8%、53.4%）

女性：**48.1%**（47.6%、46.0%）

2 年齢は何歳ですか。2014年4月1日現在でお答えください。

※2006年は［4月2日現在でお答えください］

18歳未満：**0.1%**（0.1%、0.1%）
18歳：**13.0%**（14.6%、13.1%）
19歳：**23.4%**（23.1%、20.6%）
20歳：**25.2%**（25.4%、23.8%）
21歳：**23.4%**（22.8%、24.4%）
22歳：**10.1%**（9.1%、11.6%）
23歳：**2.5%**（2.0%、3.1%）
24歳：**0.8%**（0.8%、0.8%）
25歳：**0.4%**（0.6%、0.6%）
26歳～29歳：**0.4%**（0.7%、0.8%）
30歳代：**0.3%**（0.3%、0.4%）
40歳代：**0.0%**（0.1%、0.1%）
50歳以上：**0.1%**（0.1%、0.2%）

3 入学してから何年目ですか。

1年目：**23.2%**（24.8%、22.7%）
2年目：**27.0%**（26.6%、24.4%）
3年目：**27.4%**（26.9%、26.4%）
4年目：**20.1%**（19.5%、23.8%）
5年目：**1.4%**（1.0%、1.4%）
6年目：**0.8%**（0.2%、0.3%）
7年目以上：**0.1%**（0.1%、0.1%）

4 あなたの出身高校等は次のどれですか。

私立：**43.6%**（43.7%、42.9%）
国立：**1.5%**（1.8%、1.5%）
公立：**51.1%**（51.2%、52.8%）
海外：**0.9%**（1.4%、1.3%）
高等学校卒業程度認定試験（大学入学資格検定を含む）：**0.5%**（0.7%、0.5%）
その他：**0.7%**（0.8%、0.6%）

5 あなたの現在の住まいはどちらですか。

自宅：**63.8%**（61.4%、58.3%）
自宅外：**35.4%**（37.5%、40.4%）

6 在学中の大学へはどのような選抜方法で入学しましたか。

一般入試：**39.6%**（40.0%、45.8%）
一般入試・センター試験併用：**6.3%**（5.9%、4.2%）
センター試験のみ：**7.1%**（6.6%、5.6%）
附属・系列校推薦：**7.4%**（7.2%、8.3%）（2006年は「附属推薦」）
指定校推薦：**17.9%**（17.8%、17.2%）
公募推薦：**7.5%**（8.5%、8.3%）
スポーツ・課外活動等推薦：**3.5%**（1.9%、1.8%）
帰国子女入試：**0.3%**（0.3%、0.4%）
社会人入試：**0.2%**（0.3%、0.5%）
編入学・転入学：**0.6%**（0.8%、1.1%）
AO入試・自己推薦入試：**7.7%**（8.3%、4.9%）（2006年は「AO入試」）
留学生：**0.6%**（1.3%、1.1%）
その他：**0.9%**（0.9%、0.6%）

S T U D E N T　L I F E　R E P O R T

Ⅰ章

進学目的・理由／充実度／期待

●大学進学の目的

「大学卒の学歴が必要」が３回連続で過半数を超え１位。

●所属大学の選択理由

「自宅からの通学が可能だったから」「自分の実力に合っていたから」が上位で、大学選択に無理をしない傾向。

●所属学部・学科の満足度

満足度は漸増傾向。

●大学に入ってよかったと思う点

１位「友人を得たこと」と２位「知識や技術が身についたこと」の差が縮まっている。

●学生生活の充実度

４分の３の学生は「学生生活は充実している」と回答。

●大学の施設・サービスへの要望

ほぼ半数の学生が「学生食堂の充実」を希望している。

コメント

大学進学の目的は、「大学卒の学歴が必要だと思ったから」が引き続き１位である。

在学中の大学を選択した理由としては、「自宅からの通学が可能だったから」「自分の実力（偏差値）に合っていたから」が１位、２位をキープしている。また、全体に占める割合は小さいものの、「女子大学だから」「留学制度や海外研修プログラムが充実していたから」が着実に増えてきている。

所属学部・学科への満足度、学生生活の充実度については、漸増してきており、各大学のさまざまな改革努力が評価された結果ではないかと考えられる。

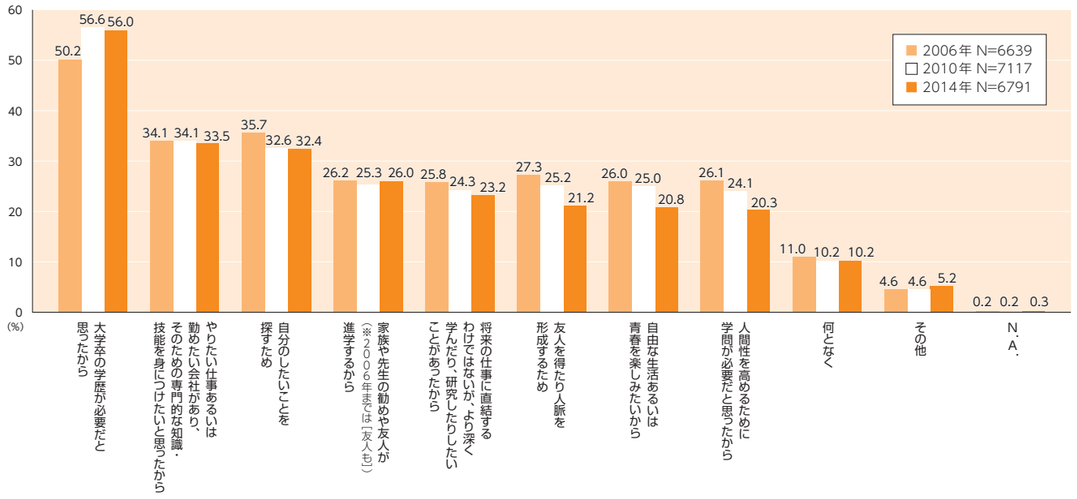
大学に入ってよかったと思う点については、2010年よりも数値は下がったものの「友人を得たこと」（68.1%）が１位をキープしている。逆に2014年も２位ではあるが、毎回着実に数値が伸びてきているのが「知識や技術が身についたこと」（62.9%）であり、両者の差は調査の回を重ねるごとに縮まってきている。

大学進学の目的

「大学卒の学歴が必要」が３回連続で過半数を超え１位。

全体としては「大学卒の学歴が必要」が56.0%と飛び抜けて高く、3回とも過半数を超えている。そして、「やりたい仕事あるいは勤めたい会社があり、そのための専門的な知識・技能を身につけたいと思ったから」、「自分のしたいことを探すため」が30%台でこれに続く。学部系統別に見ると、法律・政治・社会系と商・経済・経営系は「大学卒の学歴」、「自分のしたいことを探す」が高いが、医・歯・薬系では「やりたい仕事あるいは勤めたい会社があり、そのための専門的な知識・技能を身につけたいと思ったから」が80.5%と飛び抜けて高くなっている。「友人・人脈」、「自由な生活」、「人間性向上」については2006年から漸減傾向にある。

■大学進学の目的（降順）



所属大学の選択理由

「自宅からの通学が可能だったから」「自分の実力に合っていたから」が上位で、大学選択に無理をしない傾向。

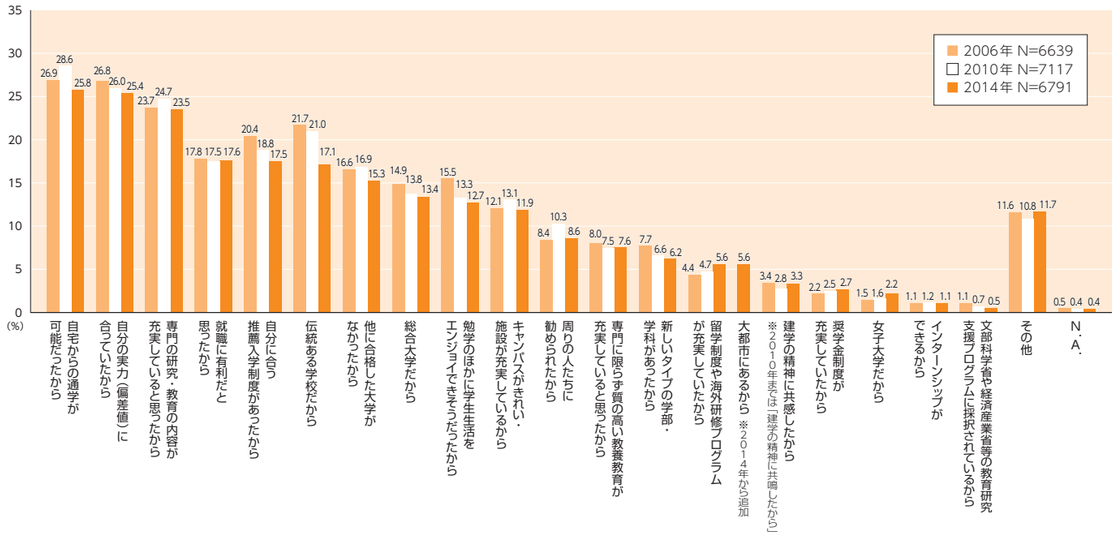
2010年から若干数値はさがったものの、依然として「自宅からの通学が可能だったから」、「自分の実力（偏差値）に合っていたから」が選択理由の1位、2位となり、引き続き大学選択に無理をしない傾向が見られる。一方「伝統ある学校だから」、「総合大学だから」という選択理由は漸減傾向にある。また「専門の研究・教育の内容が充実していると思ったから」は2010年同様3位で23.5%であった。

全体からすると割合は大きくないものの、伸び率の目立つ選択理由としては、「女子大学だから」（2010年1.6%→2014年2.2%）がある。女子大学だけの集計だと2010年は17.6%、2014年21.9%である。

また、「留学制度や海外研修プログラムが充実していたから」も全体に占める割合は小さいが、回を重ねるごとに着実に増えてきていることが分かる。

なお、今回調査から追加した「大都市にあるから」が5.6%と、一定の存在感を示している。

■所属大学の選択理由（降順）



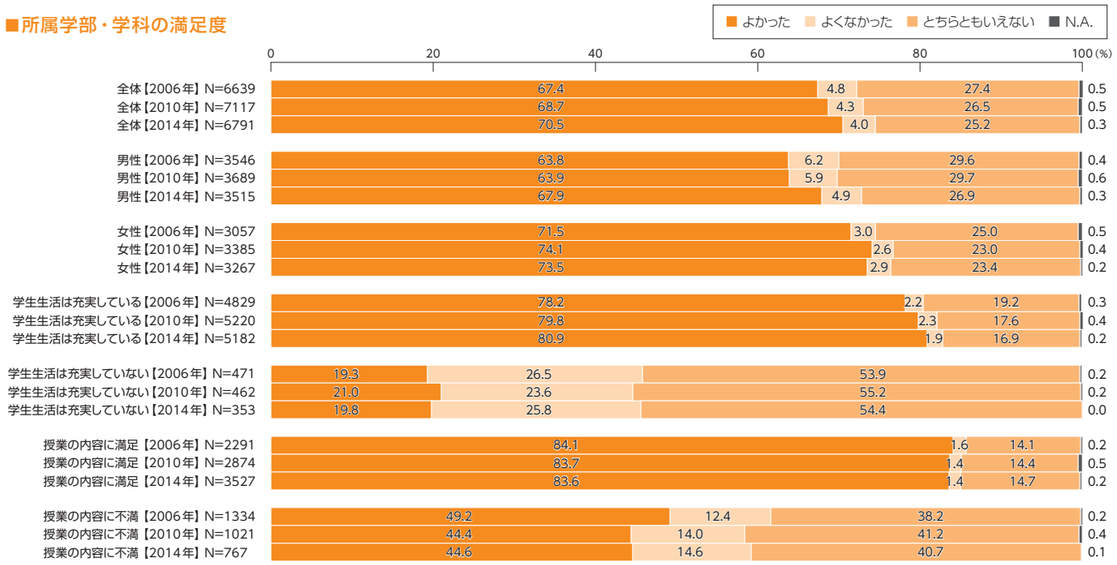
所属学部・学科の満足度

満足度は漸増傾向。

全体としては約70%が現在所属する学部・学科に入学して「よかった」としており、3回の調査で漸増傾向にある。

男性より女性の方が所属学部・学科への満足度は高く、女性では4分の3弱が満足している。また「学生生活は充実」、「授業の内容に満足」している者は、そうでない者と比べ、所属学部・学科への満足度は大幅に高くなっている。そのほかにも「何でも話せる友人」が「いる」者は72.9%が所属する学部・学科に満足しているが、「いない」者は58.8%に留まり、友人関係についても、入学した学部・学科の満足度に影響していると思われる。

■所属学部・学科の満足度

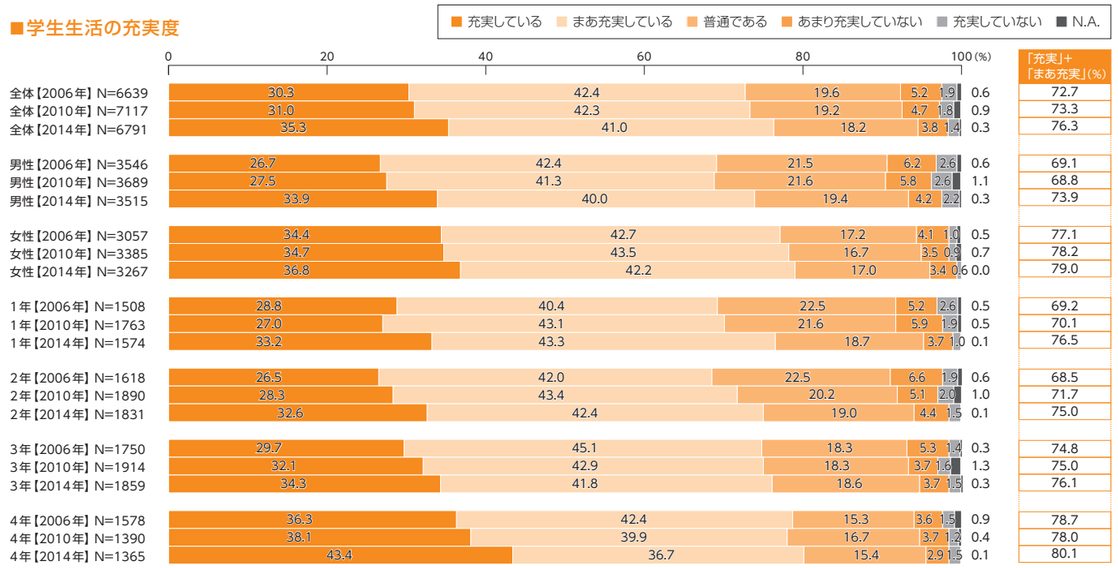


学生生活の充実度

4分の3の学生は「学生生活は充実している」と回答。

学生生活について、35.3%が「充実している」、41.0%が「まあ充実している」としている。合計すると4分の3の学生が「充実」の方向へ漸増しており、男女別、学年別に見ても同様の傾向となっている。男女別で「充実している」と「まあ充実している」の合計値を見ると、男性73.9%、女性79.0%と女性の方が学生生活の充実度が高い。またグラフにはないが、「課外活動に参加している」、「授業内容に満足している」、「何でも話せる友人がいる」と回答した者は、そうでないと回答した者に比べて顕著に学生生活の充実度が高くなっている。

■学生生活の充実度



大学に入ってよかったと思う点

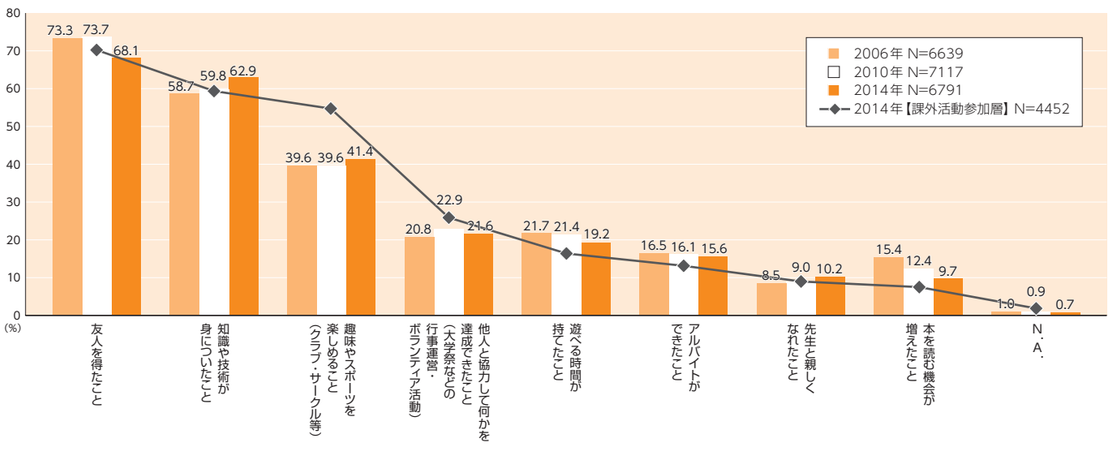
1位「友人を得たこと」と2位「知識や技術が身についたこと」の差が縮まっている。

「友人を得たこと」が引き続き高い数値であるが、2014年は68.1%となり、過去2回が73%台であったのに比べると、少し数字を落としている。一方で、良かった点の2位である「知識や技術が身についたこと」は漸増しており、両者の差は2010年の13.9ポイントから2014年の5.2ポイントへとかなり縮まった。

その他の項目にあまり大きな動きはないが、インターネット環境の充実も影響してか、「本を読む機会が増えたこと」は2006年の15.4%から2014年の9.7%へとかなり数字を落としている。

課外活動参加層では「趣味やスポーツを楽しめること」が高くなっている。グラフにはないが、「知識や技術が身についたこと」に関しては、医・歯・薬系が84.1%、理・工系が73.7%と高い数値を示している。

■大学に入ってよかったと思う点――全体と課外活動参加層比較（降順）



大学の施設・サービスへの要望

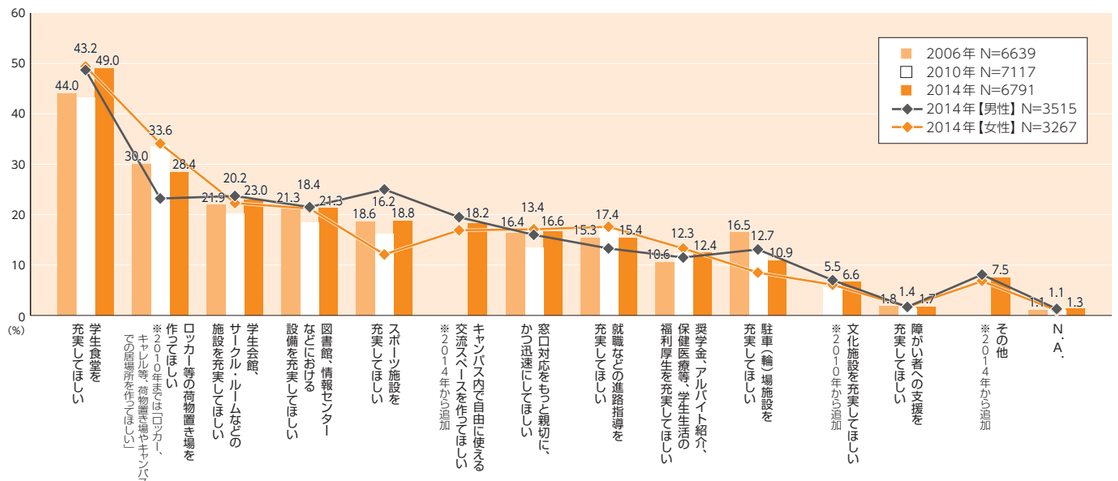
ほぼ半数の学生が「学生食堂の充実」を希望している。

「学生食堂の充実」が49.0%と1位であり、2位の「ロッカー等の荷物置き場を作ってほしい」（28.4%）以下を大きく引き離す結果となった。

今回新設した回答項目の「キャンパス内で自由に使える交流スペースを作ってほしい」も18.2%と高い数値を示した。「ロッカー等の荷物置き場を作ってほしい」や「駐車（輪）場施設を充実してほしい」は2010年より減っており、他はあまり変化はない。

男女別で見ると男性は「スポーツ施設を充実してほしい」が25.0%と高く、女性は「ロッカー等の荷物置き場を作ってほしい」が34.1%と高い。

■大学の施設・サービスへの要望――全体と性別比較（降順）



Ⅱ章

経済

●1か月の収入
総収入は2010年から9,600円の増額。

●1か月の支出
総支出は2010年から11,500円の増額となり、総収入の増額分を反映。

●経済状況
学年があがるほど経済状況に余裕を感じる学生は増加。

●学費
理・工系、医・歯・薬系で学費の負担感が大きい。

●奨学金
要望のトップは「返還の必要のない奨学金の充実」。

●アルバイト・就労
アルバイト・就労をしている学生は2010年より4.0ポイントの増加。

コメント

1か月の収入、支出の両方について2010年よりも金額が増加した。アルバイトでは「ほしい物を購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」、「社会勉強」という動機が減っている。

奨学金の受給率は42.6%で、2006年から10.3ポイントも増加している。一方、奨学金を受給していない者はその理由として19.3%が「返済義務がある」と回答しており、増加傾向にある。これは「返還の必要のない奨学金」への要望が対象者の50%を超えることとも符合する。

1か月の収入

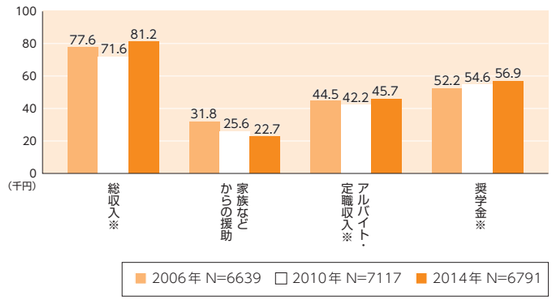
総収入は2010年から9,600円の増額。

●1か月の総収入

全体で1か月の「総収入」は81,200円であり、2010年と比べると9,600円の増となった。また、2006年と比べると、3,600円の増となった。

自宅・自宅外通学別に見ると、「総収入」は自宅70,300円、自宅外101,100円で、「家族などからの援助」は自宅10,200円、自宅外45,100円である。

■授業期間中の1か月の収入平均（N.A.を除く）

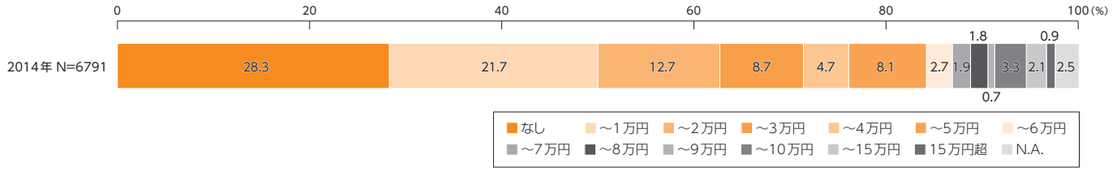


※該当者のみ集計しており、総収入とは一致しない。

●家族などからの援助

「家族などからの援助」について、2010年の1か月の収入平均額は25,600円であった。2014年については22,700円で2,900円減り、2006年から2回連続の減額となった。

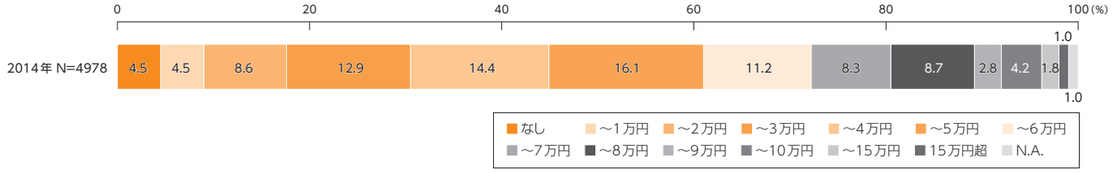
■授業期間中における1か月の家族などからの援助



●アルバイト・定職収入

「アルバイト・定職収入」の平均額は45,700円であり、2010年と比べ3,500円増額となった。上記（「家族などからの援助」）が減った分、「アルバイト・定職収入」の増加で補う形となっている。

■授業期間中における1か月のアルバイト・定職収入



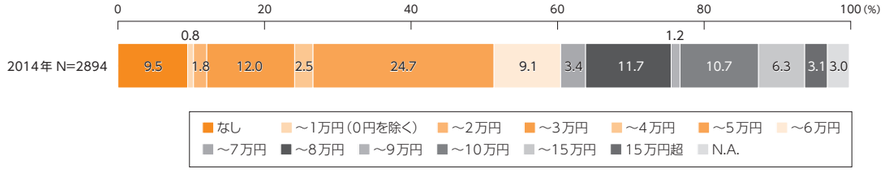
●奨学金

全体で見ると、42.6%の者が奨学金を受けており、2006年から増加傾向にある。2006年と2014年で比べると、奨学金を受けている者は10.3ポイント増加したことになる。

住まいが「自宅外」（50.6%）、「経済状況が苦しい」（49.7%）とする者は、奨学金を受けている割合が高くなっている。

奨学金の1か月の受給金額は全体平均で56,900円であり、2010年の54,600円から2,300円の増となった。8万円を超える高額受給者（2006年17.0%→2014年21.3%）と4万円以下の低額受給者（2006年14.8%→2014年17.1%）が増え、中間層が減少傾向にある。学部系統別に見ると医・歯・薬系は72,400円と突出して高い。

■授業期間中における1か月の奨学金（給付・貸与を問わない）



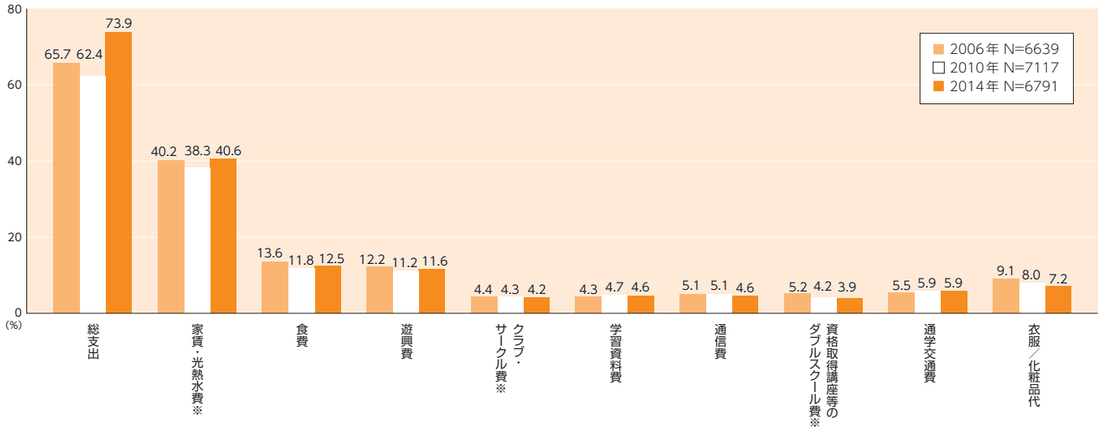
受給率（%）	
2006	32.3
2010	39.9
2014	42.6

1か月の支出

総支出は2010年から11,500円の増額となり、「総収入」の増額分を反映。

「総支出」は73,900円であり、2010年の62,400円と比べると11,500円の増となり、総収入の増額分約1万円を反映する形となった。1年生は66,200円、2年生は73,700円、3年生は75,500円、4年生は79,000円と学年があがるにつれて総支出は増える傾向にある。相対的に「家賃・光熱水費」、「食費」、「遊興費」が増え、「通信費」、「資格取得講座等のダブルスクール費」、「衣服/化粧品代」が減っているが、変化の割合は大きくない。

■授業期間中の1か月の支出平均（N.A.を除く）



※該当者のみ集計しており、総支出とは一致しない。

経済状況

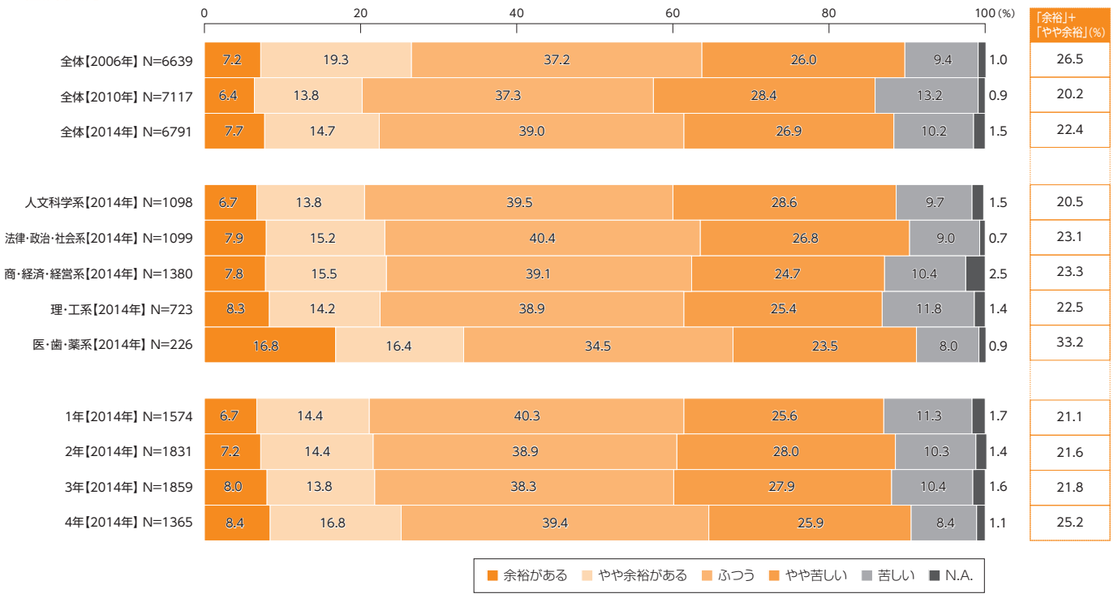
学年があがるほど経済状況に余裕を感じる学生は増加。

経済状況について、「余裕がある」または「やや余裕がある」と回答したのは全体のうち22.4%で、2010年（20.2%）よりもやや増加している。

学部系統別に見ると、医・歯・薬系は「余裕」+「やや余裕」が33.2%と、他の学部よりも経済状況に余裕があると感じる割合が高い。

また学年別に比較すると、学年があがるほど余裕と感じる割合が高くなるのが特徴的である（1年生21.1%→4年生25.2%）。

■経済状況



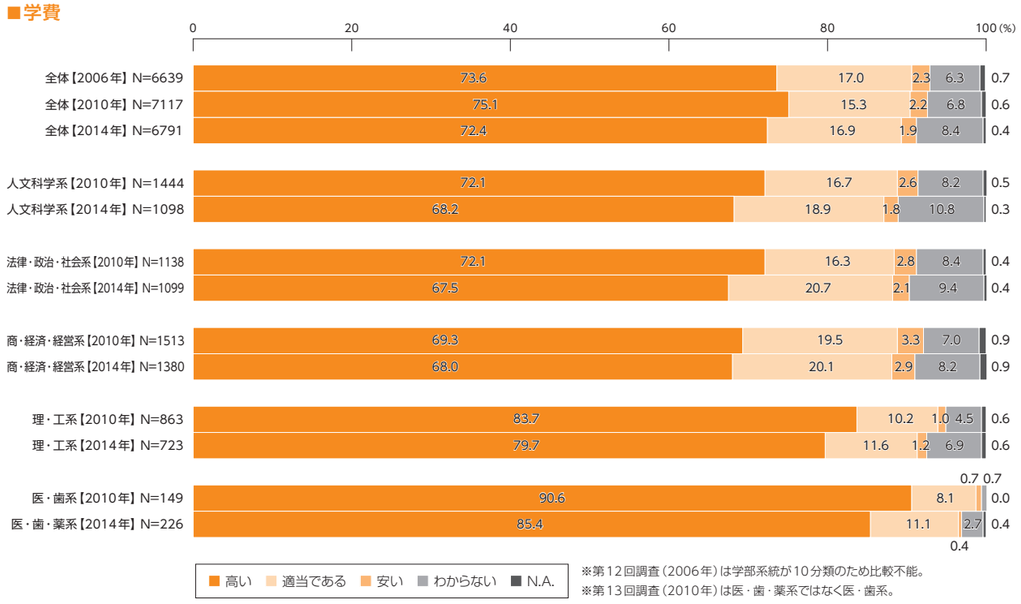
学費

理・工系、医・歯・薬系で学費の負担感が大きい。

● 学費について

学費が「高い」と回答した者は全体で72.4%と、2010年の75.1%と比べると2.7ポイント減であった。特に理・工系では79.7%、医・歯・薬系では85.4%が「高い」と回答したが、2010年と比べるとそれぞれ4.0ポイント、5.2ポイントの減少となっている。

■学費



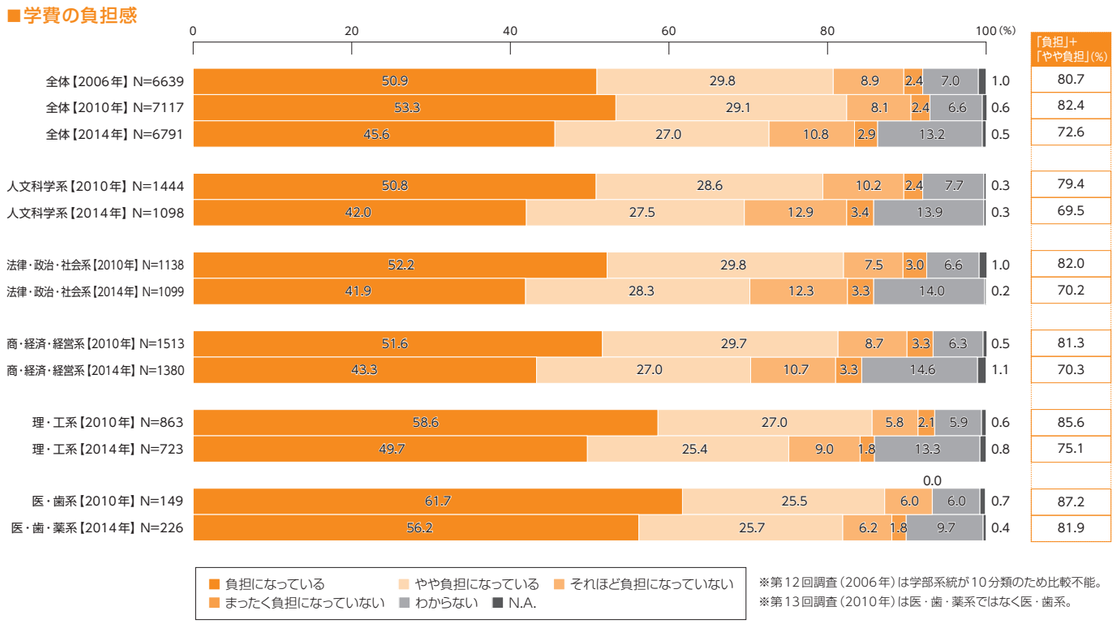
※第12回調査（2006年）は学部系統が10分類のため比較不能。
※第13回調査（2010年）は医・歯・薬系ではなく医・歯系。

● 学費の負担感

家計に対して学費が負担になっている（「負担になっている」+「やや負担になっている」）と回答した者は全体のうち72.6%で、上記の「学費が高い」と回答する学生とほぼ同じ割合である。しかし、2010年の82.4%から9.8ポイントの減少となった。

学部系統別の傾向も上記と同じく、理・工系、医・歯・薬系で学費が負担になっていると感じる者が多い。

■学費の負担感



※第12回調査（2006年）は学部系統が10分類のため比較不能。
※第13回調査（2010年）は医・歯・薬系ではなく医・歯系。

奨学金

要望のトップは「返還の必要のない奨学金の充実」。

● 奨学金制度への要望

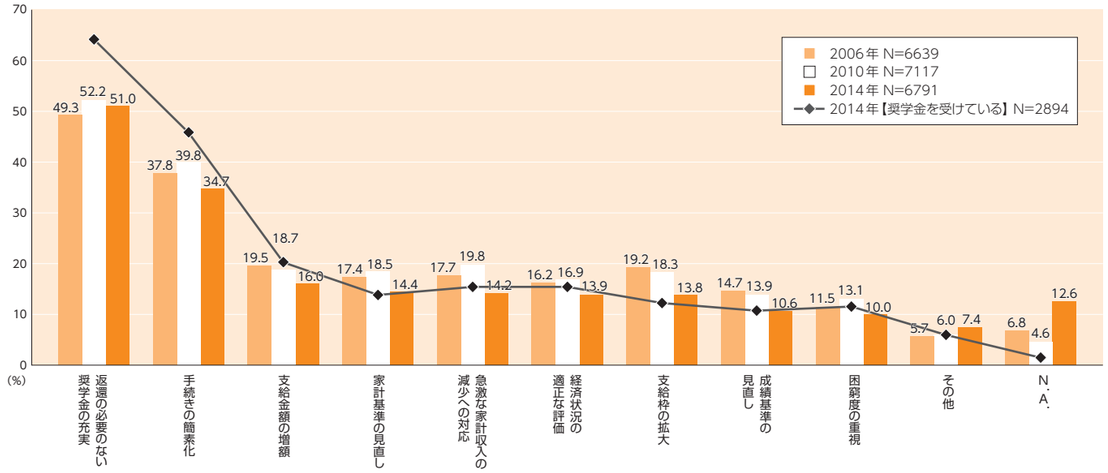
奨学金への要望のトップは「返還の必要のない奨学金の充実」(51.0%) で半数以上の者が要望しており、3回とも同水準である。

また、「手続きの簡素化」は34.7%と第2位であったが、2010年の39.8%と比べると5.1ポイントの減となった。

それ以外の項目は16%以下であり、「支給金額の増額」(16.0%)、「家計基準の見直し」(14.4%)、「急激な家計収入の減少への対応」(14.2%) と近い水準で続いている。

また、奨学金を受けている者の中では「返還の必要のない奨学金の充実」が64.5%、「手続きの簡素化」が46.1%と、この2項目への要望が大変高くなっている。

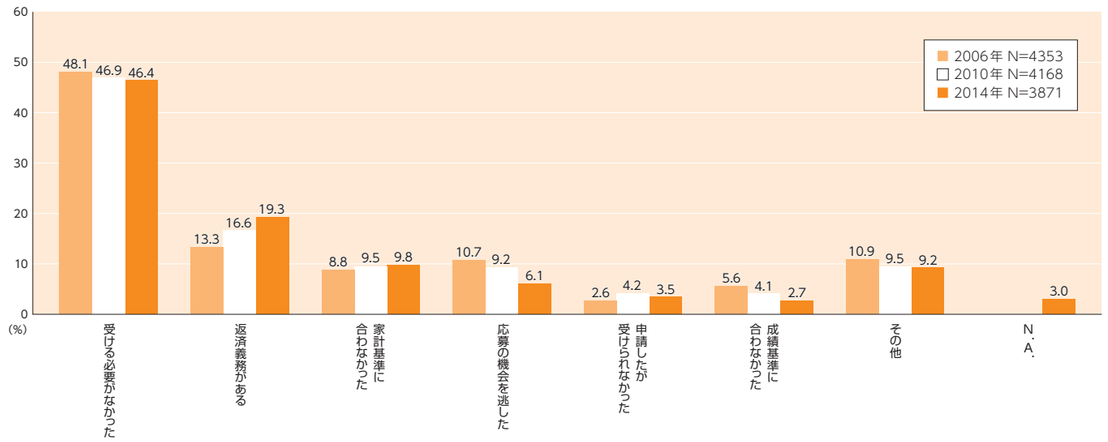
■奨学金制度への要望（降順）



● 奨学金を受けていない理由

奨学金を受けていない理由として最も多く挙げられたのは「受ける必要がなかった」(46.4%) だが、その割合は漸減傾向にある。一方、2位の「返済義務がある」(19.3%) は増加傾向にある。このことは、先述した奨学金制度への要望のトップに「返還の必要のない奨学金の充実」が挙がっていることとも符合する。

■奨学金を受けていない理由（降順）



アルバイト・就労

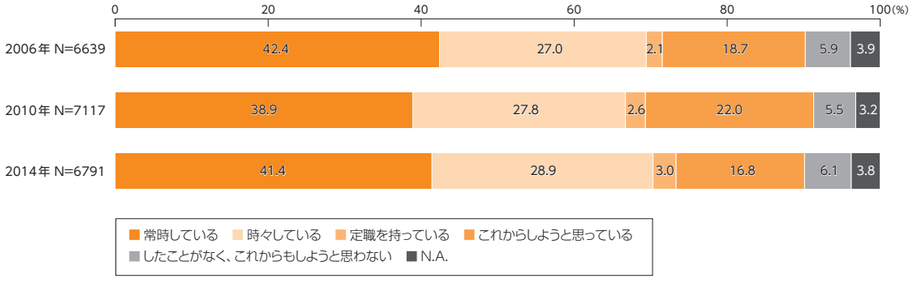
アルバイト・就労をしている学生は2010年より4.0ポイントの増加。

●アルバイト・就労をしている学生

全体のうちアルバイトをしている学生は73.3%で、その内訳は「常時している」41.4%、「時々している」28.9%、「定職を持っている」3.0%である。経年で比較すると、2010年 (69.3%) から4.0ポイント増となった。

1か月間の就労平均時間は48時間30分と、2010年の47時間6分と比べ、1時間24分の増加となった。時間給を計算すると、2010年は896.0円、2014年は942.3円となり、約46円増加した。

■アルバイト・就労の状況



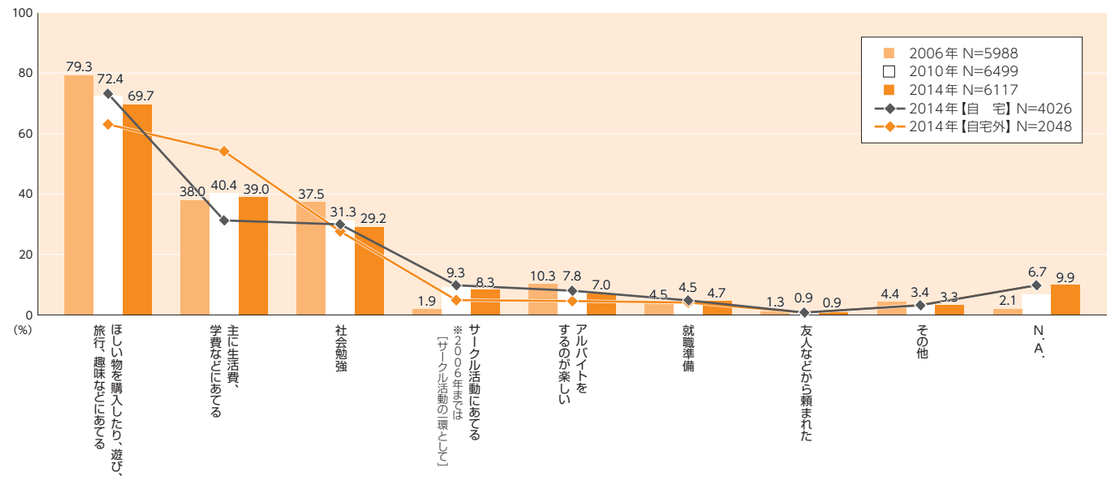
	「常時している」+「時々している」+「定職を持っている」(%)	1か月の就労平均時間
2006年 N=6639	71.5	51h42m
2010年 N=7117	69.3	47h6m
2014年 N=6791	73.3	48h30m

●アルバイトをする動機

アルバイトをする動機としては「ほしい物を購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」が69.7%と突出して高く、2位「主に生活費、学費などにあてる」(39.0%)、3位「社会勉強」(29.2%) が続く。それ以外の動機については10%以下となっている。経年で比較すると2位の「主に生活費、学費などにあてる」はほとんど変わらない数値だが、1位の「ほしい物を購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」、3位の「社会勉強」は減少傾向にある。

自宅・自宅外通学別に見ると、上位3項目の順位は全体と同様であるが、自宅からの通学者の1位「ほしい物を購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」の73.1%に対し2位の「主に生活費、学費などにあてる」が31.3%と、1位の項目について突出具合がより顕著になっている。一方自宅外からの通学者は「主に生活費、学費などにあてる」が54.1%と相対的に高い。また「社会勉強」「サークル活動にあてる」「アルバイトをするのが楽しい」が自宅からの通学者よりも低く（それぞれ2.3ポイント差、4.9ポイント差、3.4ポイント差）、生活のためにアルバイトをしている様子が見てとれる。

■アルバイトをする動機――全体と自宅・自宅外通学別比較（降順）



S T U D E N T　L I F E　R E P O R T

Ⅲ章

ライフ（大学生活）

●平均的な１日の生活時間
課外活動参加時間は増加、睡眠時間は減少。

●興味・関心事
学習に対する意識が向上している。

●大学生活で大切なこと
「よい成績をとること」「講義・ゼミ・研究会などにきちんと出席すること」が増加し、興味・関心事と同傾向。

●食事回数
４人に１人は１日の食事回数が２回以下。

●朝食について
朝食を毎日とるのは全体の６割程度。

●喫煙・受動喫煙
喫煙率は減少し続け、2006年の半分近い（16.4%→8.9%）。

●薬物の使用について
自己責任での使用容認派が増えている。

コメント

大学の勉強に対する関心が高く、専門的知識・技術の習得や講義・ゼミ等への出席を大切に考えており、学習に対する真摯な態度が強くなってきていることがうかがえる。

今回の調査より、食事に関する設問を新たに設けた。1日3回食事をする者や毎日朝食をとる学生ほど学生生活が充実しており、健康的な生活習慣を身につけることの重要性が示唆されている。

喫煙率は2006年の半分近くにまで低下した。また、薬物に関して自己責任での使用容認派が増えてきていることは看過できないポイントである。

平均的な１日の生活時間

課外活動参加時間は増加、睡眠時間は減少。

● 生活時間

キャンパス滞在時間の平均は、6時間10分と2010年の6時間3分から比べると7分の増となった。学年があがるにつれて減少する傾向が見られる（1年生6時間32分→4年生5時間13分）。また、女性（6時間18分）より男性（6時間2分）の方が滞在時間が短い。

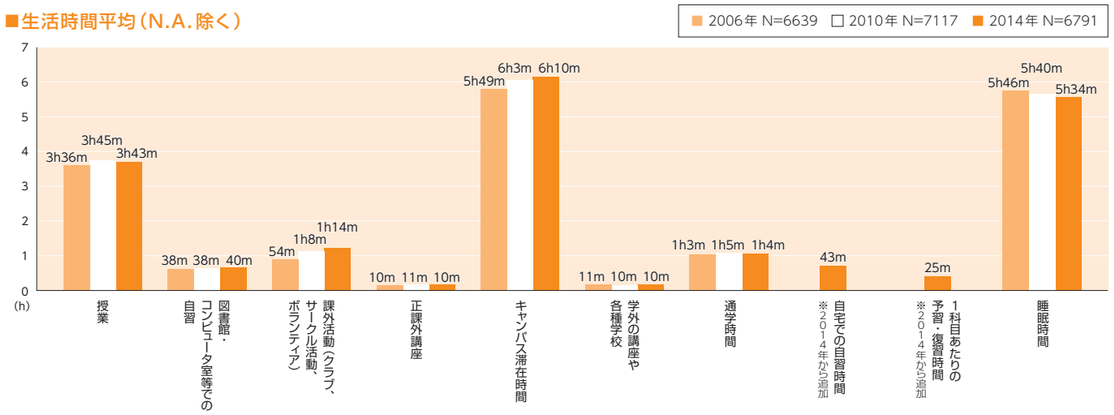
課外活動に費やす時間は1日平均1時間14分で、増加傾向にある。

自宅からの通学者の通学時間の平均は1時間23分であり、2010年の1時間25分とほぼ同じである。自宅外からの通学者の92.2%が1時間以内であり、2010年（91.0%）と比較して微増し、今回も90%を超えた。性別で1時間1分～4時間までの通学時間帯を比較すると、男性（33.1%）に比べ、女性（42.4%）の数値が高い。これは2010年と同傾向（男性33.5%、女性41.4%）であり、自宅外からの通学者の差（男性39.0%、女性31.6%）が影響しているものと考えられる。

1日あたりの自宅での自習時間および1科目あたりの予習・復習時間の平均はそれぞれ43分、25分だった。学部系統別では医・歯・薬系学部で自宅での自習時間、1科目あたりの予習・復習時間が共に長い傾向がある（それぞれ1時間3分、38分）。

睡眠時間の平均は5時間34分と2010年の5時間40分と比べて減少した。2006年は5時間46分であり、減少傾向である。今回も学年があがるとともに睡眠時間は長くなる傾向が見られた（1年生5時間25分→4年生5時間47分）。

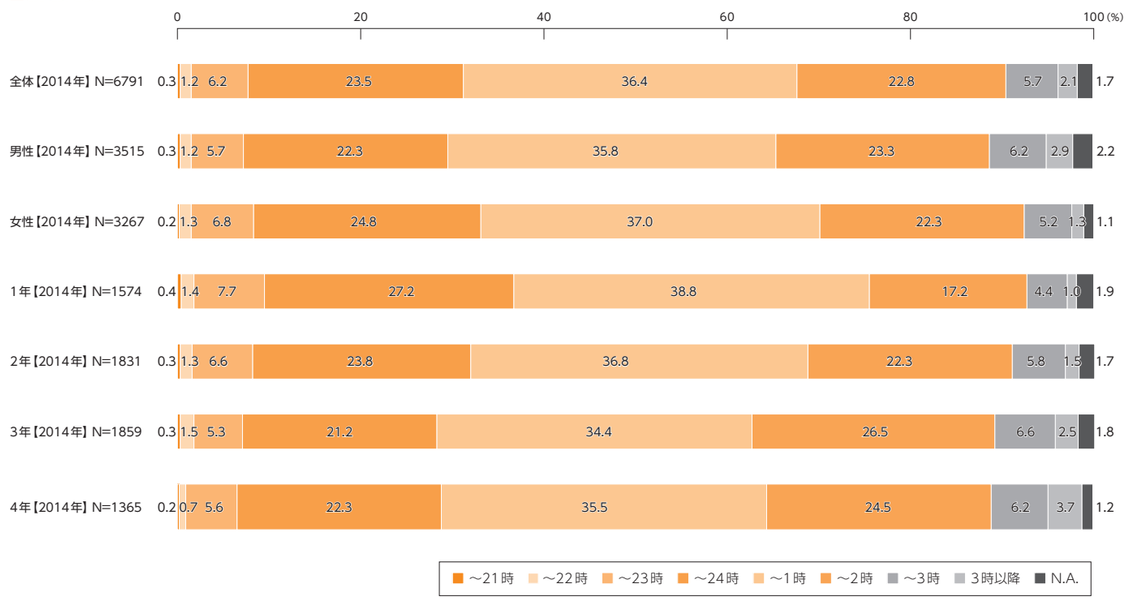
■生活時間平均（N.A.除く）



● 就寝時刻

就寝が1時台以降という深夜型は全体の30.6%であり、女性（28.8%）より男性（32.4%）が、低学年より高学年（1年生22.6%→4年生34.4%）が深夜型の傾向にある。

■就寝時刻



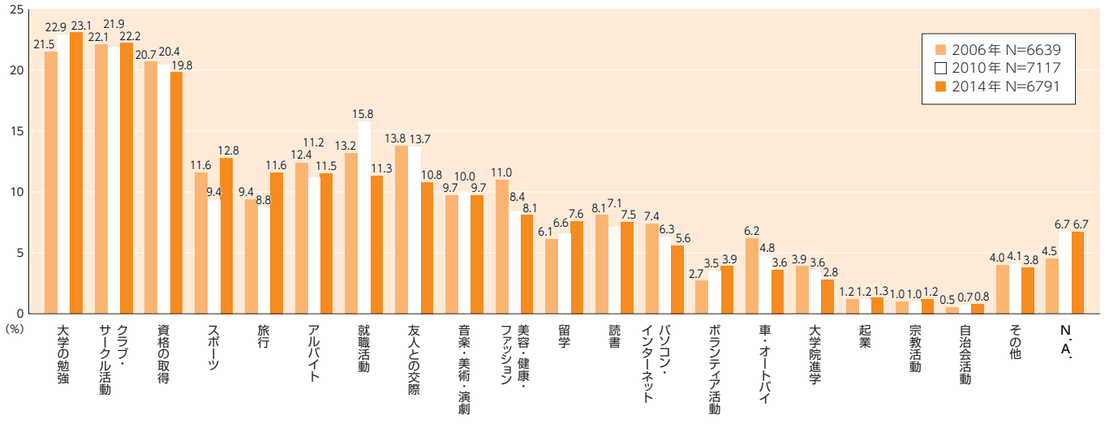
興味・関心事

学習に対する意識が向上している。

● 全体

「大学の勉強」(23.1%)、「クラブ・サークル活動」(22.2%)、「資格の取得」(19.8%)が2010年同様トップ3となった。2010年と比べ、「大学の勉強」「クラブ・サークル活動」は微増し、「資格の取得」は微減となった。「大学の勉強」は2006年から3回の調査で連続して上昇(2006年21.5%→2014年23.1%)しており、学習に対する意識の向上がうかがえる。また、「就職活動」「友人との交際」が減少し、「スポーツ」「旅行」が増加したため、4位「スポーツ」(12.8%)、5位「旅行」(11.6%)、6位「アルバイト」(11.5%)、7位「就職活動」(11.3%)と順位が入れ替わった。

■現在、興味や関心を持っていること・行っていること――全体(降順)



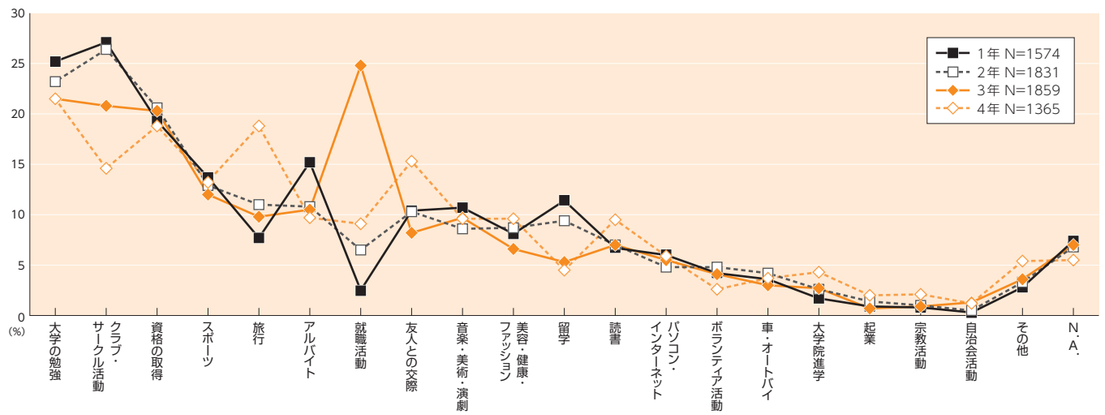
● 学年別

学年別のトップ3は以下の通りである。

1年生:①クラブ・サークル活動　②大学の勉強　③資格の取得
2年生:①クラブ・サークル活動　②大学の勉強　③資格の取得
3年生:①就職活動　②大学の勉強　③クラブ・サークル活動
4年生:①大学の勉強　②資格の取得　③旅行

特に「就職活動」に対する関心において学年差が大きい。また、「クラブ・サークル活動」は高学年ほど関心がさがり、「旅行」は逆に高学年ほど関心度があがる傾向にある。

■現在、興味や関心を持っていること・行っていること――学年別比較



大学生活で大切なこと

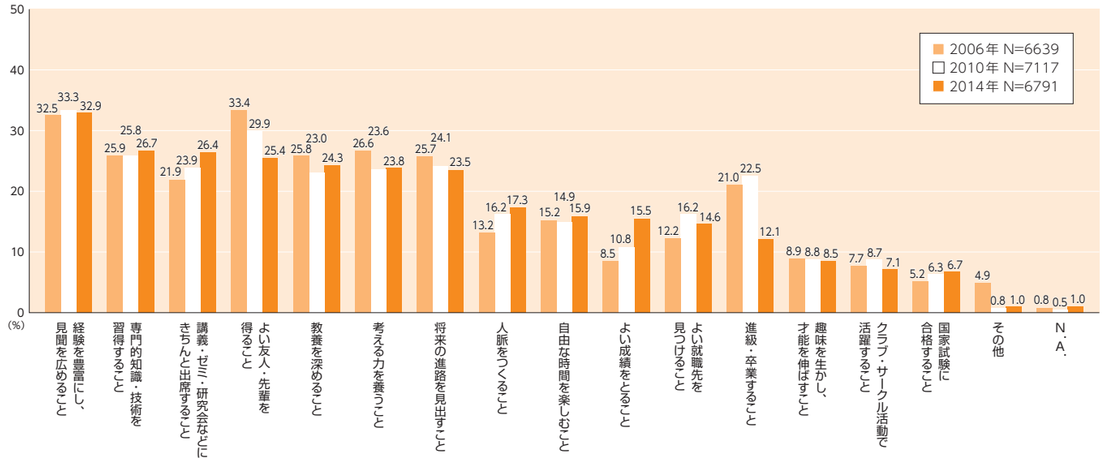
「よい成績をとること」「講義・ゼミ・研究会などにきちんと出席すること」が増加し、興味・関心事と同傾向。

全体として「経験を豊富にし、見聞を広めること」(32.9%)が1位となった。2位は「専門的知識・技術を習得すること」(26.7%)であった。この2項目は2006年、2010年とほぼ変わらない。

「講義・ゼミ・研究会などにきちんと出席すること」(26.4%)、「人脈をつくること」(17.3%)「よい成績をとること」(15.5%)は増加傾向を示している。特に「よい成績をとること」は2006年の8.5%から、今回の15.5%へと7.0ポイント増加している。逆に「よい友人・先輩を得ること」(25.4%)、「将来の進路を見出すこと」(23.5%)は、2006年(33.4%、25.7%)・2010年(29.9%、24.1%)の調査より減少傾向にある。「よい友人・先輩を得ること」は2006年の1位(33.4%)から今回の4位に後退した。

「進級・卒業すること」は12.1%と、2010年(22.5%)に比べ、10.4ポイントの減となった。

■大学生活で大切なこと(降順)



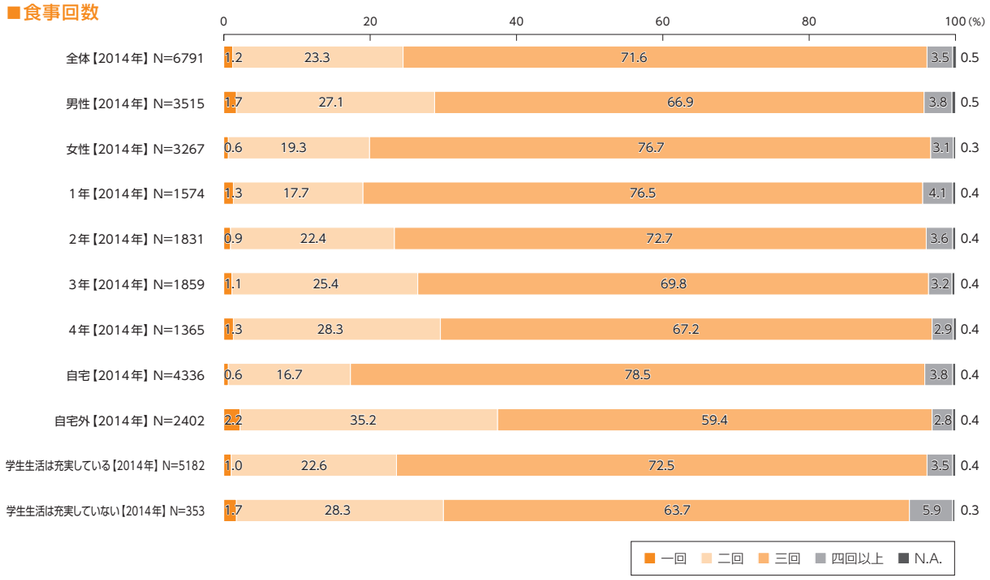
食事回数

4人に1人は1日の食事回数が2回以下。

食事の回数は1日3回以上が75.1%であった。逆にいうと4分の1の学生は1日2回以下である。具体的には1日2回が23.3%、1日1回が1.2%であり、平均は2.78回であった。

1日2回以下の者の割合は属性間の格差が大きい。具体的には、男性（28.8%）＞女性（19.9%）、4年生（29.6%）＞1年生（19.0%）、自宅外からの通学者（37.4%）＞自宅からの通学者（17.3%）であった。また、食事の回数が少ない者は、学生生活が充実していない（30.0%）＞充実している（23.6%）という傾向を示した。

■食事回数

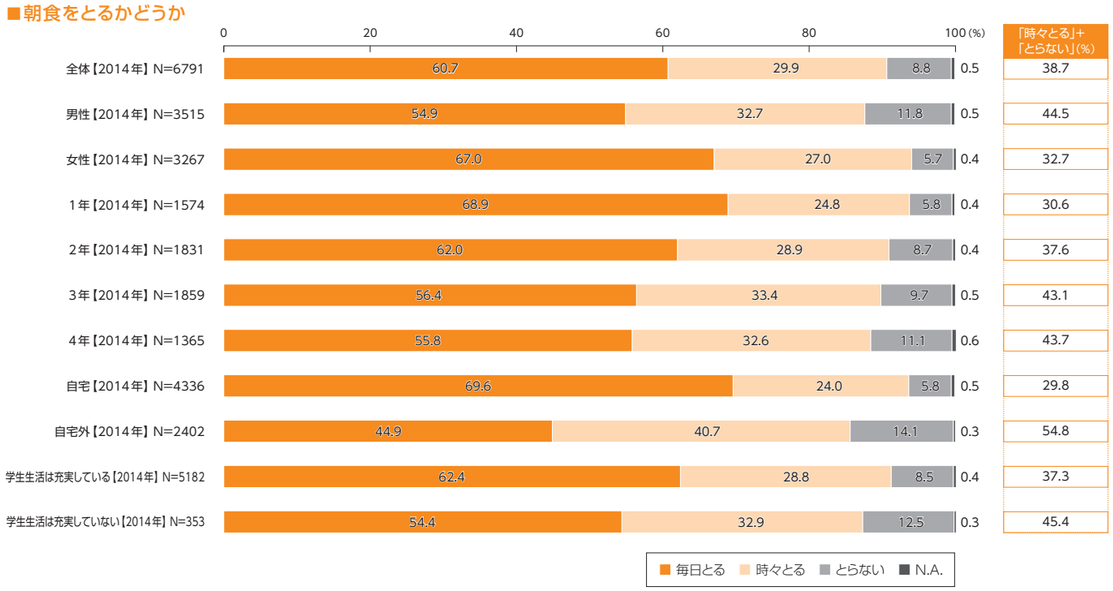


朝食について

朝食を毎日とるのは全体の6割程度。

朝食を毎日とる者は全体で60.7%であり、とらないことがある者（「時々とる」+「とらない」）は38.7%という数字であった。これもまた、朝食をとらないことがある者は属性間の差が大きい。具体的には、男性（44.5%）＞女性（32.7%）、4年生（43.7%）＞1年生（30.6%）、自宅外からの通学者（54.8%）＞自宅からの通学者（29.8%）であった。またここでも、朝食をとらないことがある者は、学生生活が充実していない（45.4%）＞充実している（37.3%）という傾向を示した。

■朝食をとるかどうか



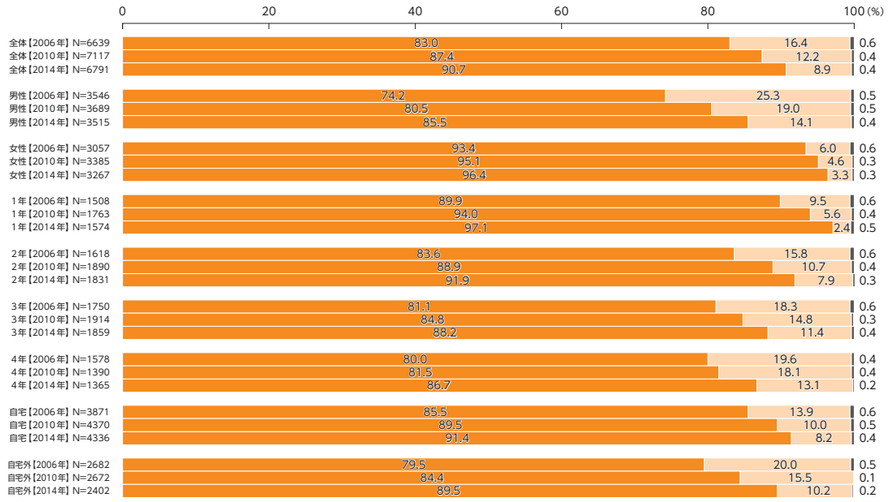
喫煙・受動喫煙

喫煙率は減少し続け、2006年の半分近い（16.4%→8.9%）。

全体の喫煙率は8.9%であり、2006年の16.4%、2010年の12.2%と漸減傾向にある。性別で見ると、喫煙者は男性14.1%、女性3.3%であった。また、学年があがるにつれて喫煙者は増える（1年生2.4%→4年生13.1%）。2010年に比べ、性別、学年別、自宅・自宅外通学別の全ての属性で喫煙率は減少している。

また、非喫煙者にキャンパス内での受動喫煙について尋ねたところ、全体で「非常に気になる」（26.6%）、「少し気になる」（28.1%）と計54.7%の者が「気になる」としており、男女差、学年差も少ない。大学キャンパス内での禁煙化、分煙化が進んでいるためか、「気になる」の割合は2006年71.5%、2010年64.5%、2014年54.7%と減少してきている。

■喫煙状況



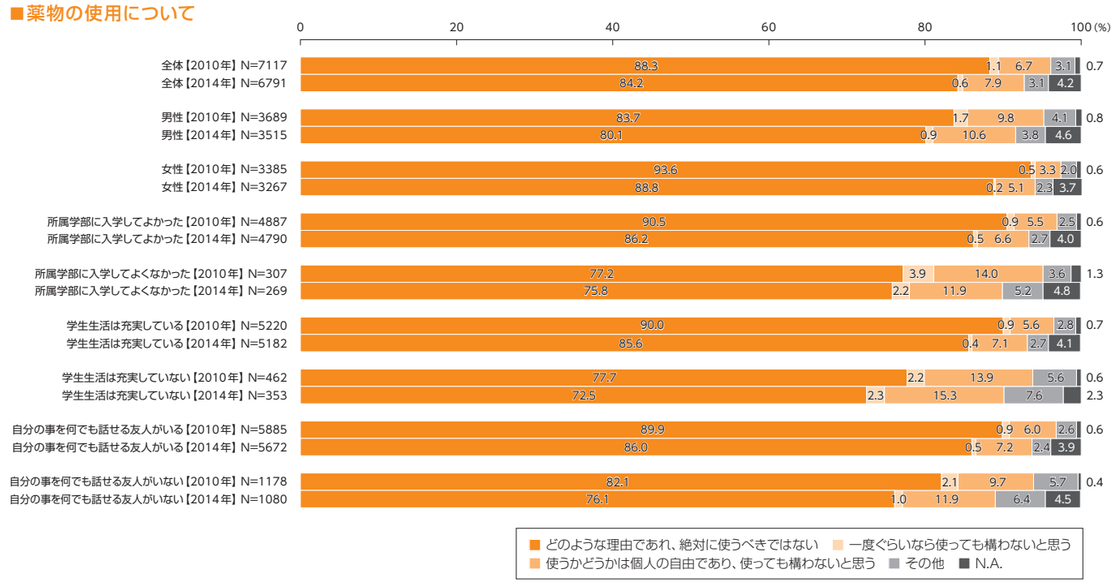
【受動喫煙】「非常に気になる」+「少し気なる」の比率（%）	
2006	71.5
2010	64.5
2014	54.7

薬物の使用について

自己責任での使用容認派が増えている。

薬物使用については、「どのような理由であれ、絶対に使うべきではない」と回答した者は84.2%と2010年の88.3%と比べると4.1ポイントの減となった。「一度ぐらいなら使っても構わないと思う」とする者は0.6%と2010年より減っている。ただ、「使うかどうかは個人の自由であり、使っても構わないと思う」という自己責任での使用容認派は2010年の6.7%から7.9%へと増えている。近年、危険ドラッグが身近になってきているため、こうした結果に注目し、対処が必要である。

■薬物の使用について



S T U D E N T　L I F E　R E P O R T

Ⅳ章

正課教育

●正課教育の満足度

全ての項目について満足度は向上している。

●正課教育と課外活動の比重

「正課教育と課外活動は学生生活のそれぞれ半分ずつ程度である」が減少し、どちらか一方が主要部分を占めると回答する学生がわずかに増加。

●科目履修の時に重視する要因

動機として挙がる項目の上位は変わらないものの、下位との差は縮まっている。

●講義への希望

分かりやすさに関する要望が多く見受けられる。

●教育内容・方法への期待・要望

ほぼ全ての項目について、2010年と比べて減少傾向。

コメント

正課教育に対する満足度は調査の回を重ねるごとに向上し、今回調査では「大変満足」+「満足」が50%を超える項目が目立った。これは大学サイドの不断の努力の結果ともいえるだろう。

今後の要望としては、大きくいえば「より分かりやすい講義」（板書等の工夫、レジュメの配布、身近な事例を扱う、視聴覚教材の活用等）が挙げられる。

学生側の教育内容・方法への期待や講義への要望は大きく捉えると「身近なところから分かりやすく、楽しく専門知識を学びたい」というニーズがあり、それが「板書やプレゼンテーションを工夫してほしい」、「社会問題や身近な事例を扱った授業を増やしてほしい」、「レジュメを配布してほしい」、「ビデオなどの視聴覚教材を活用してほしい」といった講義の要望となっているようだ。「楽しく学びたい」という思いを、教育内容・方法へどう反映させていくかが各大学に問われているといえよう。

正課教育の満足度

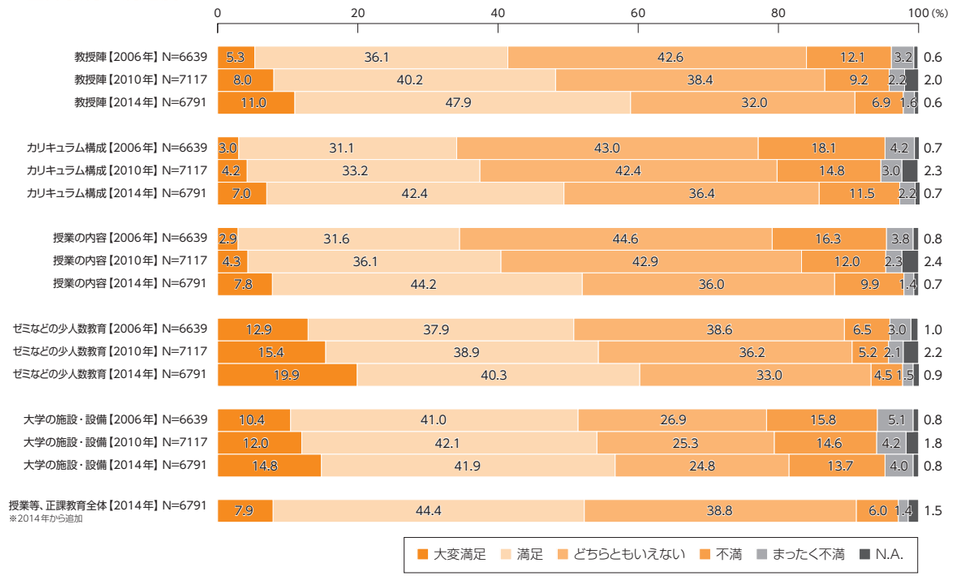
全ての項目について満足度は向上している。

正課教育の満足度は全ての項目（「教授陣」、「カリキュラム構成」、「授業の内容」、「ゼミなどの少人数教育」、「大学の施設・設備」）で向上している。2006年から3回連続で向上していることになる。「大変満足」+「満足」の数値を見ると、「カリキュラム構成」は合計で49.4%と半数を切ったが、その他の項目は全て50%を超え、特に「ゼミなどの少人数教育」は60.2%と6割以上となった。また、それに伴い不満足、特に「まったく不満」という者が減ってきている。

男女別で見ると、相対的に女性の評価が高くなっている。学年別に見ると、高学年ほど「ゼミなどの少人数教育」に対する評価が高くなる傾向にある（1年生49.7%→4年生71.6%）。

正課教育の満足度と学生生活の充実度（P.12）には相関関係があり、全項目とも学生生活の充実度が高くなるほど正課教育の満足度が高い。特に「授業の内容」の評価について顕著である（学生生活が充実している者は、正課教育について「大変満足」+「満足」が57.5%。一方学生生活が充実していない者は、正課教育について「大変満足」+「満足」が23.8%）。

■正課教育の満足度



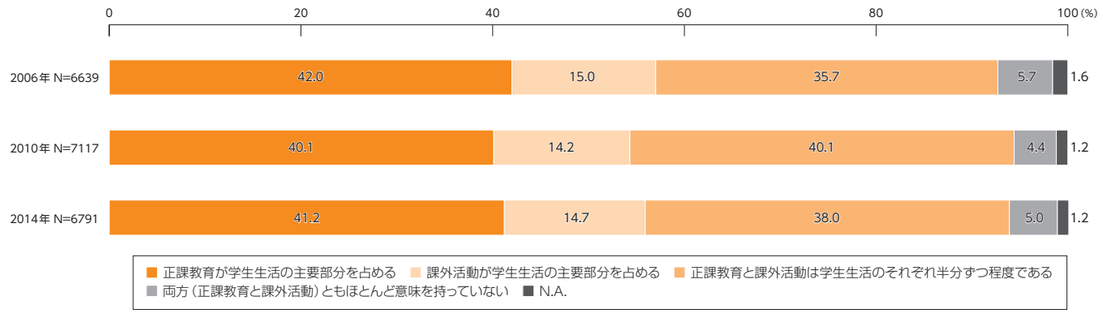
	「大変満足」+「満足」(%) 全体	男性	女性
教授陣【2006年】	41.4	37.1	46.4
教授陣【2010年】	48.2	43.9	52.8
教授陣【2014年】	58.9	57.4	60.6
カリキュラム構成【2006年】	34.1	31.5	36.9
カリキュラム構成【2010年】	37.4	33.4	41.9
カリキュラム構成【2014年】	49.4	48.4	50.4
授業の内容【2006年】	34.5	30.3	39.5
授業の内容【2010年】	40.4	35.7	45.5
授業の内容【2014年】	52.0	50.0	54.1
ゼミなどの少人数教育【2006年】	50.8	45.9	56.5
ゼミなどの少人数教育【2010年】	54.3	49.1	60.1
ゼミなどの少人数教育【2014年】	60.2	57.2	63.3
大学の施設・設備【2006年】	51.4	49.4	53.9
大学の施設・設備【2010年】	54.1	51.9	56.6
大学の施設・設備【2014年】	56.7	55.6	58.0
授業等、正課教育全体【2014年】※2014年から追加	52.3	49.7	55.0

正課教育と課外活動の比重

「正課教育と課外活動は学生生活のそれぞれ半分ずつ程度である」が減少し、どちらか一方が主要部分を占めると回答する学生がわずかに増加。

全体として大きな変化は見られないが、2006年から過去2回は「正課教育と課外活動は学生生活のそれぞれ半分ずつ程度である」が漸増傾向であったが、ここにきて38.0%と減少した。その分「正課教育が学生生活の主要部分を占める」が1.1ポイント、「課外活動が学生生活の主要部分を占める」が0.5ポイント増え、分散化している。

■正課教育と課外活動の比重



科目履修の時に重視する要因

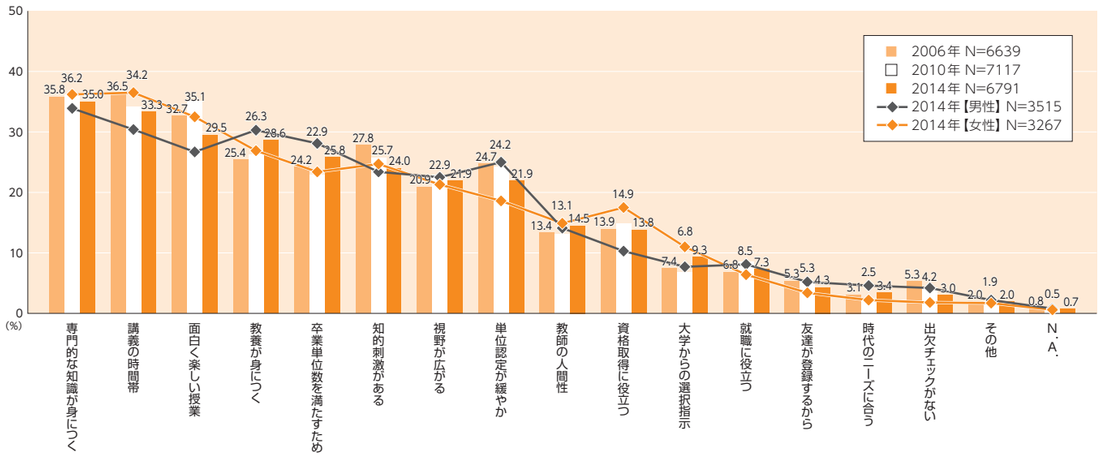
動機として挙がる項目の上位は変わらないものの、下位との差は縮まっている。

上位3項目は「専門的な知識が身につく」(35.0%)、「講義の時間帯」(33.3%)、「面白く楽しい授業」(29.5%)で2010年と変わらないが、数値的には減少している。

また、「講義の時間帯」、「知的刺激がある」、「単位認定が緩やかなどの項目は漸減傾向ではあるが、上位動機のゾーンにある。

男女別で見ると、女性は「講義の時間帯」、「面白く楽しい授業」、「資格取得に役立つ」の動機が男性に比べて多く、男性は「卒業単位数を満たすため」、「単位認定が緩やか」の動機が女性に比べて多い。

■科目履修の時に重視する要因――全体と性別比較(降順)



講義への希望

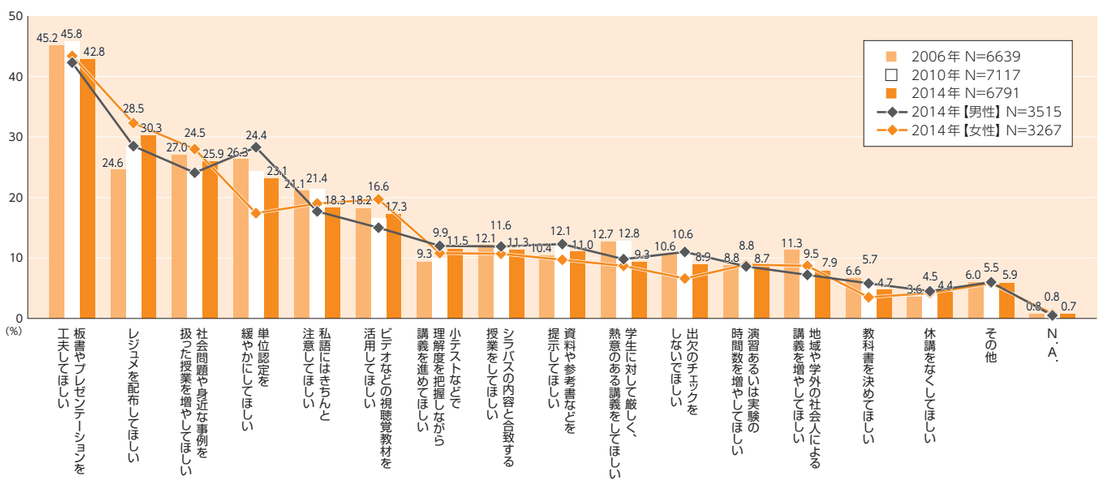
分かりやすさに関する要望が多く見受けられる。

1位は「板書やプレゼンテーションを工夫してほしい」で42.8%である。2010年の45.8%と比べると3.0ポイント減っているが、2位の「レジュメを配布してほしい」が30.3%であることを考えると大変重要なニーズだといえる。3位は「社会問題や身近な事例を扱った授業を増やしてほしい」で25.9%であり、分かりやすさに関する要望が多く見受けられる。

男女別に差の大きいところを見ると、男性の方では「単位認定を緩やかにしてほしい」、「出欠のチェックをしないでほしい」などの消極的要望が、女性では「レジュメを配布してほしい」、「社会問題や身近な事例を扱った授業を増やしてほしい」、「ビデオなどの視聴覚教材を活用してほしい」など、全体の傾向と同じく分かりやすさに関する要望が比較的多くなっている。

学年別で見ると、学年があがるほど積極的に講義を受けたいとする声が多くなる傾向が見られる(「単位認定を緩やかにしてほしい」(1年生25.5%→4年生16.8%)、「学生に対して厳しく、熱意のある講義をしてほしい」(1年生7.3%→4年生12.5%)、「私語にはきちんと注意してほしい」(1年生16.6%→4年生21.5%)など)。

■講義への希望――全体と性別比較(降順)



教育内容・方法への期待・要望

ほぼ全ての項目について、2010年と比べて減少傾向。

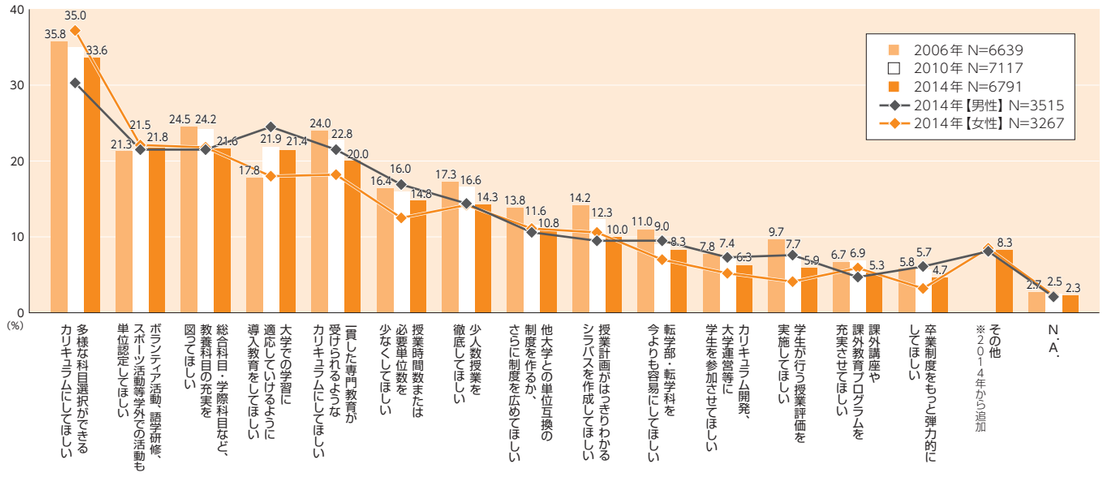
● 全体

多くの項目で2010年と比べて減少という結果となった。しかしながら1位の「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」が33.6%であり、2位以下が25%以下であることを考えると、大変強い要望であるといえる。「総合科目・学際科目など、教養科目の充実を図ってほしい」も「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」に意味的に近い項目であるが、要望が強い。

経年で見ると、2位の「ボランティア活動、語学研修、スポーツ活動等学外での活動も単位認定してほしい」が21.8%と前回を0.3ポイント上回った以外は全ての項目で減少という結果となった。

男女別で見ると、男性からは「大学での学習に適応していけるように導入教育をしてほしい」や「一貫した専門教育が受けられるようなカリキュラムにしてほしい」、「授業時間数または必要単位数を少なくしてほしい」の要望が高く、女性からは「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」との要望が高い。

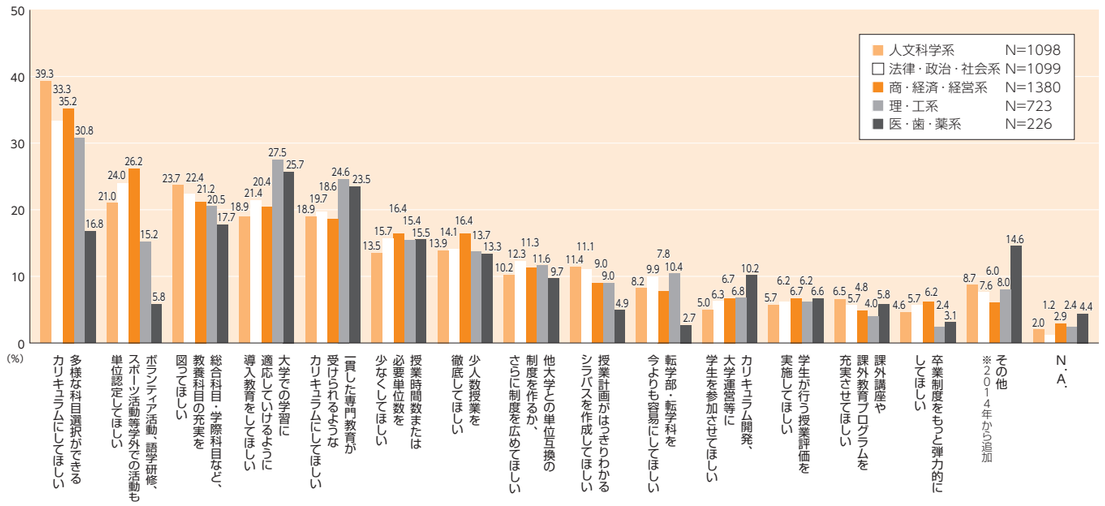
■教育内容・方法への期待・要望――全体と性別比較(降順)



● 学部系統別

学部系統別で見ると、相対的に人文科学系、法律・政治・社会系、商・経済・経営系の学部では「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」、「ボランティア活動、語学研修、スポーツ活動等学外での活動も単位認定してほしい」が、理・工系、医・歯・薬系では「大学での学習に適応していけるように導入教育をしてほしい」、「一貫した専門教育が受けられるようなカリキュラムにしてほしい」への要望が多くなっている。

■教育内容・方法への期待・要望――学部系統別比較



S T U D E N T L I F E R E P O R T

V章

正課外活動

●学内の正課外講座・学外の講座や各種学校

学内の正課外講座は微減、学外講座は漸減傾向にある。

●課外活動参加（クラブ・サークル活動・ボランティア）について

課外活動への参加率は7割超となった。

●どのような課外活動を好むのか

活動内容1位の「体育会活動」は微増、2位の「文化・芸術活動」は微減。

●課外活動に参加する目的

参加の目的は分散気味。

●課外活動に参加しての満足度

「友人、居場所を得た」が1位で2010年調査と同傾向。

●課外活動に参加していない（やめた）理由

「アルバイトと両立できない」「勉強と両立できない」が上位。

●インターンシップ

1年生でも7割弱が関心を持っており、早い段階で就職を見据えている。

●ボランティア

「震災等災害関係活動」が大きく増加。

コメント

クラブ、サークル活動などの正課外活動への参加は70%を超え、ますます盛んになってきている。正課外活動に参加しての満足度は、「友人、居場所を得た」が65.5%で1位である。ただ、参加していない（やめた）理由は、1位「アルバイトと両立できない」（20.0%）、2位「勉強と両立できない」（19.1%）であり、奨学金等制度面での支援の可能性があると考えられる。

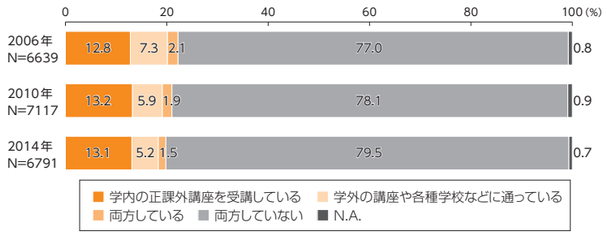
インターンシップについては、1年生の段階から関心が高く、学年があがるごとに関心が高まり、3年生でピークとなっている。ボランティア活動の内容では、「震災等災害関係活動」が2010年2.2%から2014年19.2%へと飛躍的に増加している。

学内の正課外講座・学外の講座や各種学校

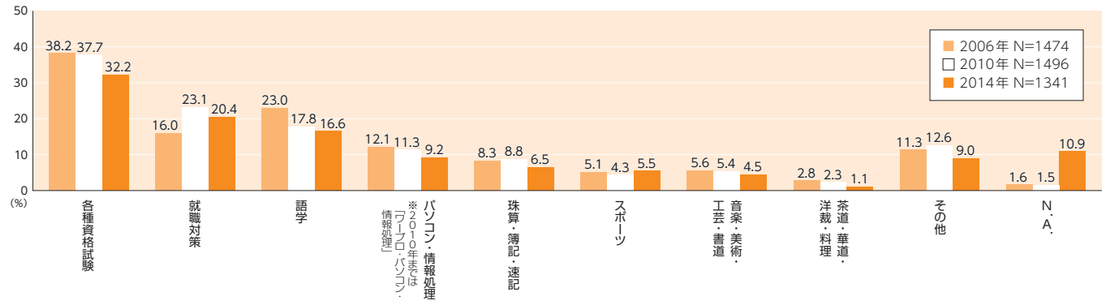
学内の正課外講座は微減、学外講座は漸減傾向にある。

学内の正課外講座の受講者は2010年に比べて微減、一方学外の講座や各種学校に通う者は漸減傾向にある。受講内容としては、「各種資格試験」（32.2%）が1位となっているが、全体的に2010年と比較して減少している項目が目立つ。これは正課教育の内容に就職対策や語学、パソコン・情報処理を組み込む大学が増加していることによると推測できる。

■正課外講座・学外の講座や各種学校への参加



■受講内容（降順）



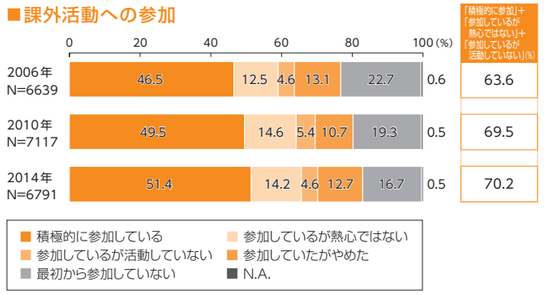
課外活動参加（クラブ・サークル活動・ボランティア）について

課外活動への参加率は7割超となった。

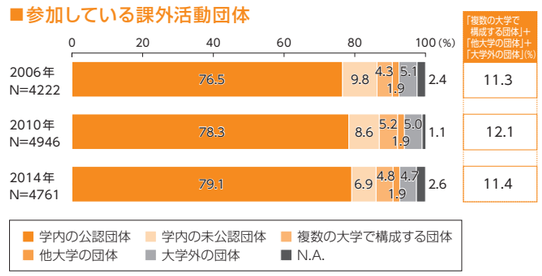
課外活動（クラブ、サークル活動、ボランティア）への参加率は2006年の63.6%、2010年の69.5%から微増し、今回は70.2%と7割の大台を超えた。主として参加している団体は「学内の公認団体」が79.1%と2010年の78.3%から0.8ポイント増加した。しかし「学内の未公認団体」が6.9%と2010年の8.6%から1.7ポイント減少した結果、学内団体がメインの者は今回86.0%と2010年の86.9%から0.9ポイント微減となった。複数大学を含む学外団体を主とする者についても、11.4%と2010年の12.1%から0.7ポイント微減することとなった。

課外活動に積極的に参加している比率を属性別に見ると、人文科学系、法律・政治・社会系、商・経済・経営系はほぼ50%以上であるのに対し、理・工系、医・歯・薬系はそれぞれ45.0%、47.3%と若干低い。また、学年（1年生56.9%→4年生42.3%）、学生生活の充実度（充実している57.9%→充実していない25.8%）による差が顕著である。

■課外活動への参加

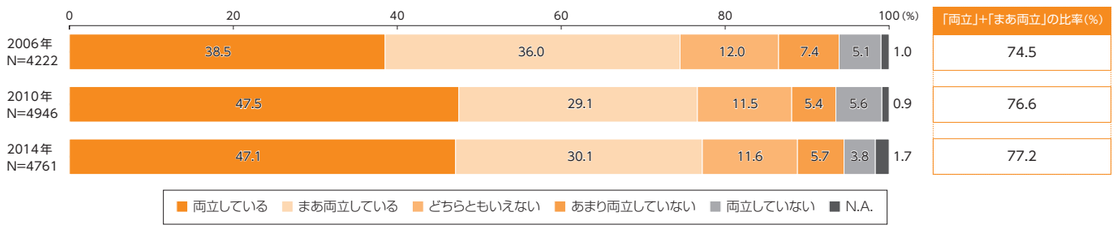


■参加している課外活動団体



課外活動と授業との両立については「両立している」、「まあ両立している」は2010年の76.6%から微増して77.2%となり、8割近い者が「両立している」と回答している。性別で見ると男性75.0%に対し女性79.4%で、女性の方が「両立している」と回答した割合が4.4ポイント高かった。

■課外活動と授業の両立



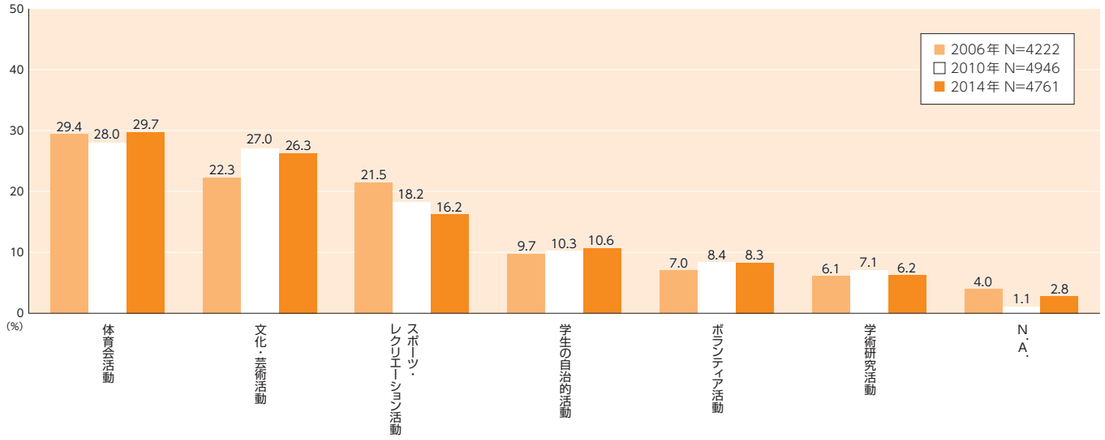
どのような課外活動を好むのか

活動内容1位の「体育会活動」は微増、2位の「文化・芸術活動」は微減。

課外活動参加者の、その主な活動内容は1位「体育会活動」(29.7%)、2位「文化・芸術活動」(26.3%)が突出しており、以下「スポーツ・レクリエーション活動」(16.2%)、「学生の自治的活動」(10.6%)、「ボランティア活動」(8.3%)と続く。

「体育会活動」は2010年と比べると微増(1.7ポイント増)し、「文化・芸術活動」は微減(0.7ポイント減)している。「スポーツ・レクリエーション活動」は2006年は21.5%であったが、2010年は18.2%、2014年は16.2%と漸減傾向である。

■課外活動内容(降順)



課外活動に参加する目的

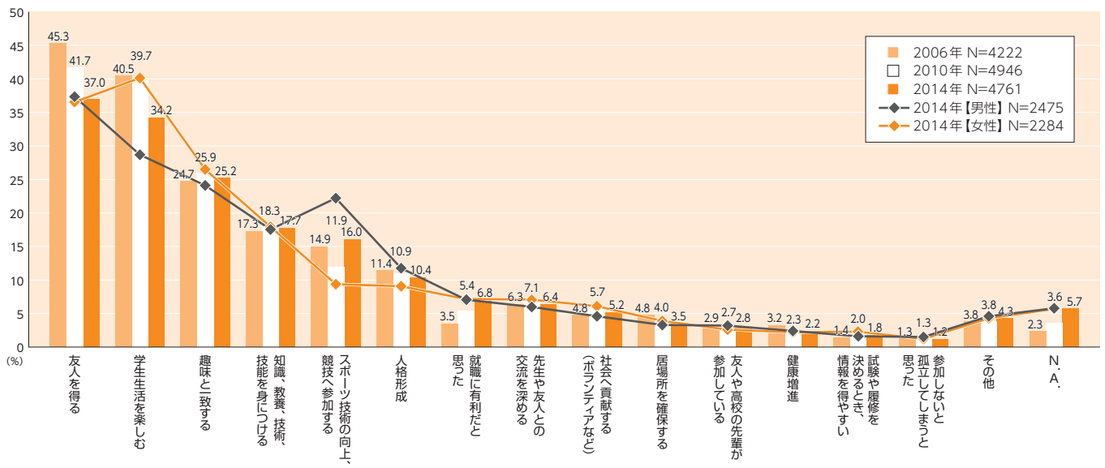
参加の目的は分散気味。

上位5位までの順位の変動はなかったが、1位「友人を得る」(37.0%)は2010年より4.7ポイント減、2位「学生生活を楽しむ」(34.2%)は5.5ポイント減となり、この2項目の突出度は2010年と比べて低くなっており、若干目的が分散気味となってきている。

性別で見ると「スポーツ技術の向上、競技へ参加する」という目的が男性では22.2%(女性9.3%)と高く、女性では「学生生活を楽しむ」が40.2%(男性28.7%)と高くなっている。

学部系統別で見ると、「趣味と一致する」が人文科学系、理・工系ともに31.0%と高く、「先生や友人との交流を深める」が医・歯・薬系で19.7%と高いのが特徴的である。また、スポーツ推薦の者が多いためか、推薦入試による入学者では「スポーツ技術の向上、競技へ参加する」が23.2%と一般入試による入学者の10.3%よりかなり高い。

■課外活動に参加する目的(降順)――全体と性別比較



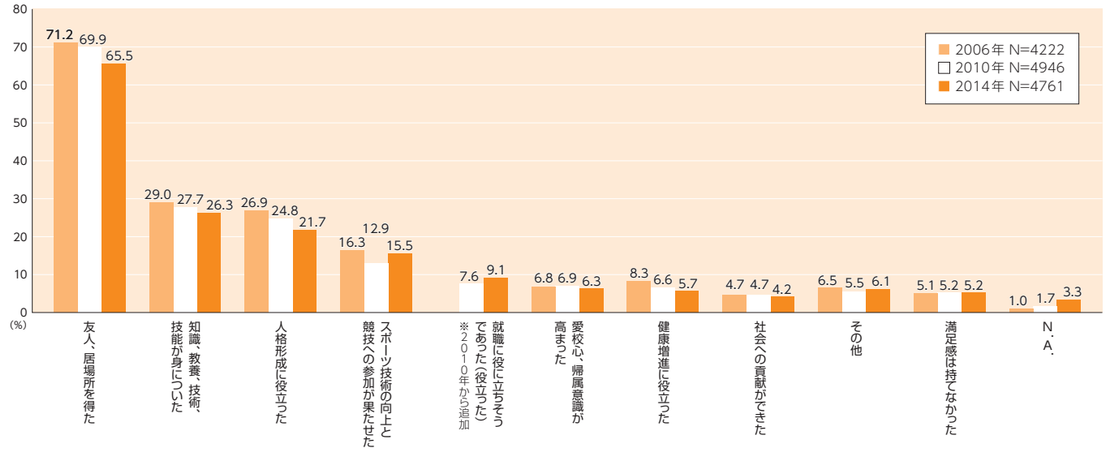
課外活動に参加しての満足度

「友人、居場所を得た」が1位で2010年調査と同傾向。

現在、課外活動を行っている者に、その満足度が高い項目を2つ選んでもらった。その結果、課外活動参加者のうち、約3分の2(65.5%)が「友人、居場所を得た」ことに満足している。第2位が「知識、教養、技術、技能が身についた」(26.3%)であることを考えると、いかにこの項目が突出しているか分かる。学年差もほとんどない。

3位は「人格形成に役立った」で、この項目は学年があがるにつれ高くなる。(1年生14.8%→4年生30.0%)。その他属性別では、「スポーツ技術の向上と競技への参加が果たせた」で男性(20.7%)と推薦入学者(21.8%)が、「健康増進に役立った」で医・歯・薬系(12.1%)が相対的に高い満足度を示している。

■課外活動に参加しての満足度(降順)



課外活動に参加していない(やめた)理由

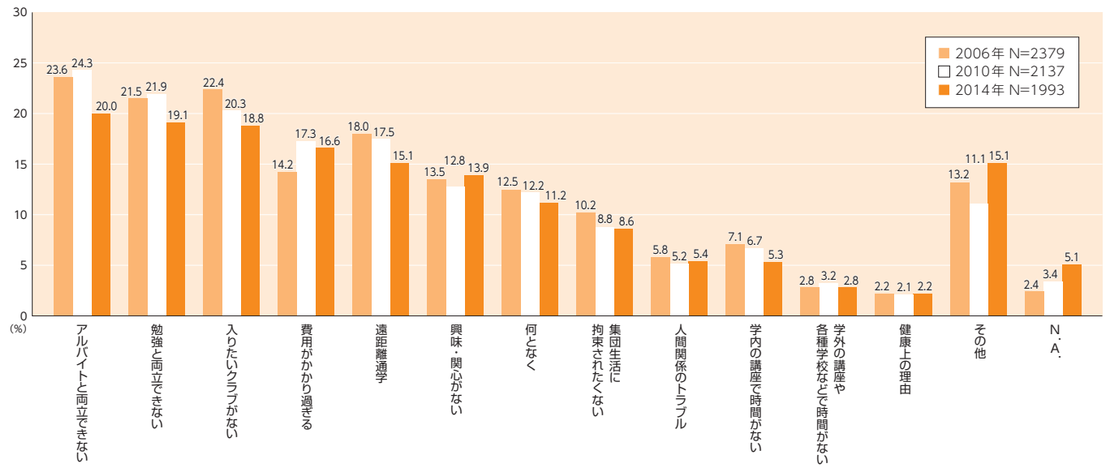
「アルバイトと両立できない」「勉強と両立できない」が上位。

課外活動に「参加していたがやめた」または「最初から参加していない」とする者の理由としては、1位「アルバイトと両立できない」(20.0%)、2位「勉強と両立できない」(19.1%)、3位「入りたいクラブがない」(18.8%)、4位「費用がかかりすぎる」(16.6%)、5位「遠距離通学」(15.1%)であった。

「集団生活に拘束されたくない」(8.6%)、「人間関係のトラブル」(5.4%)などの人とのコミュニケーションに関する理由はどちらかというと少数派であった。

学部系統別に見ると理・工系、医・歯・薬系で「勉強と両立できない」との声が多い(それぞれ28.0%、39.1%)。また、大学の規模別で見ると、学生数の少ない大学ほど「入りたいクラブがない」という声が相対的に多かった。

■課外活動に参加していない(やめた)理由(降順)



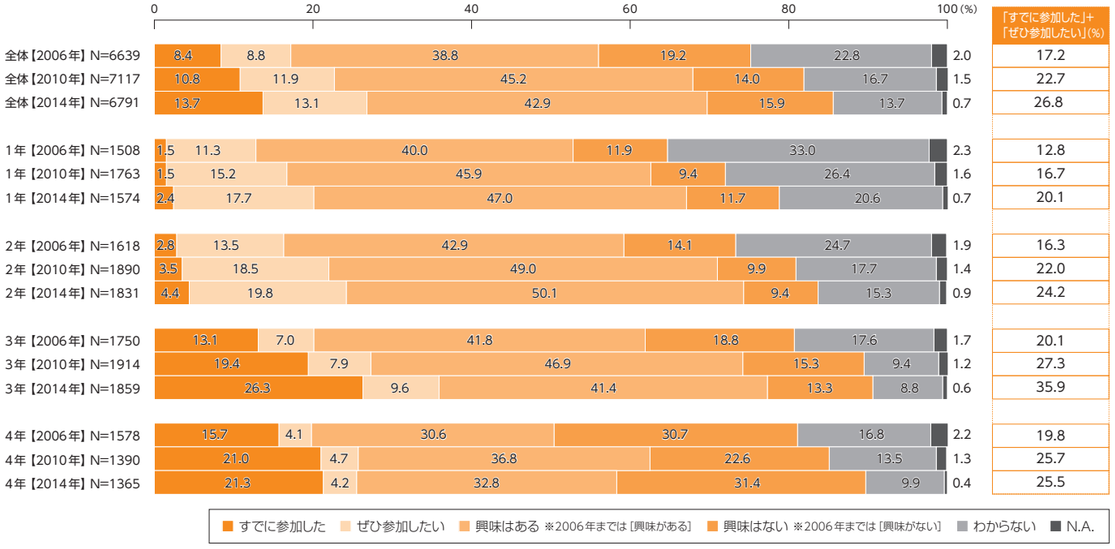
インターンシップ

1年生でも7割弱が関心を持っており、早い段階で就職を見据えている。

インターンシップについては「すでに参加した」+「ぜひ参加したい」という積極的な層は2006年17.2%、2010年22.7%、2014年26.8%と回を追うごとに増えてきている。逆に「興味はない」、「わからない」とする層は合計29.6%であり、減ってきている。

1年生でも積極的な層は20.1%と2割を超え、「興味はある」者を含めると67.1%であり、インターンシップ制度の認知度が高くなっていることがわかる。また、1年生の段階から就職・進路に関心を寄せていることもこのデータから読み取ることができる。学年があがるごとに関心が高まり、3年生で積極的な層は35.9%でピークとなっている。

■インターンシップへの参加意向



ボランティア

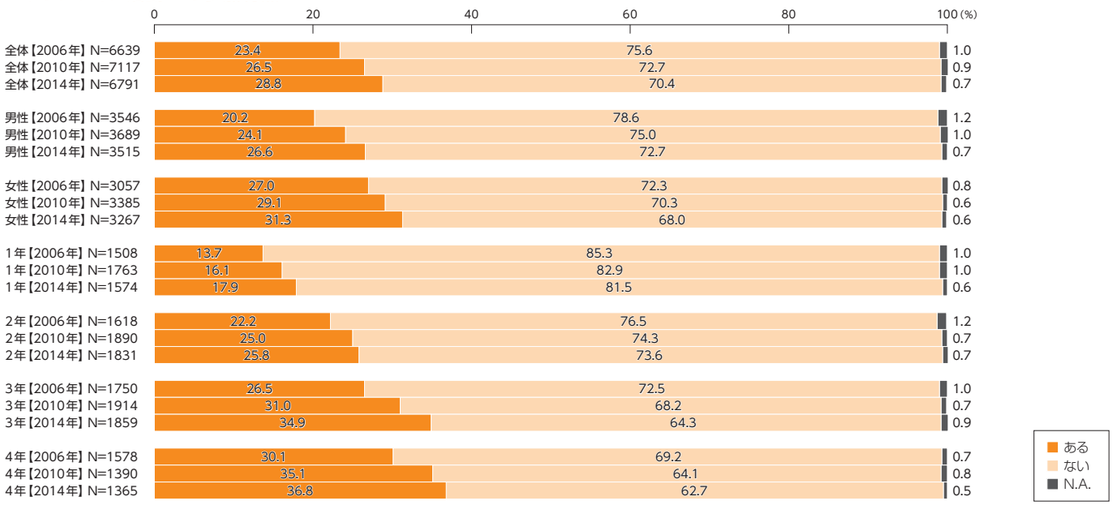
「震災等災害関係活動」が大きく増加。

● ボランティア活動への参加有無

大学入学後のボランティア経験については「ある」とする者が28.8%となり2006年23.4%、2010年26.5%と回を追うごとに増加傾向にある。「現在興味関心を持っていること」でもボランティアは増加しており(P.21)、関心度は高くなってきているといえるだろう。また、性別・学年別を問わず一貫して参加経験率が上昇している。

性別で見ると男性(26.6%)より女性(31.3%)の方が参加経験率が高く、また、学年別で見ると学年があがるほど参加経験率が高くなる(1年生17.9%→4年生36.8%)。

■ボランティア活動への参加有無

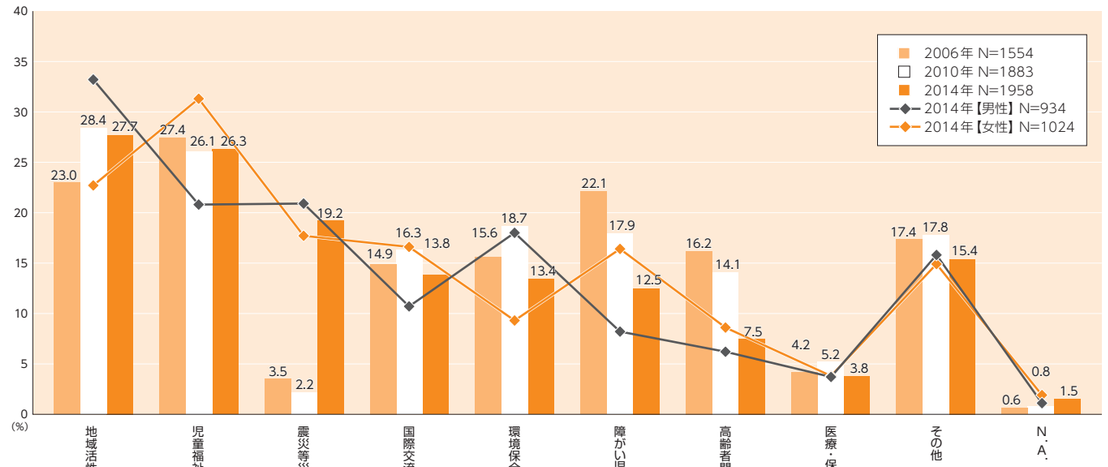


● ボランティア活動の内容

ボランティア活動の具体的な内容として最も多く挙げられたのは「地域活性化活動」(27.7%)で、以下「児童福祉関係活動」(26.3%)、「震災等災害関係活動」(19.2%)、「国際交流活動(国内外)」(13.8%)、「環境保全活動」(13.4%)と続く。3位の「震災等災害関係活動」は2010年から17.0ポイント増加し19.2%へと大きな伸びを見せている。

性別で見ると男性は「地域活性化活動」の割合が高く(33.2%)、女性は「児童福祉関係活動」の割合が高い(31.3%)。

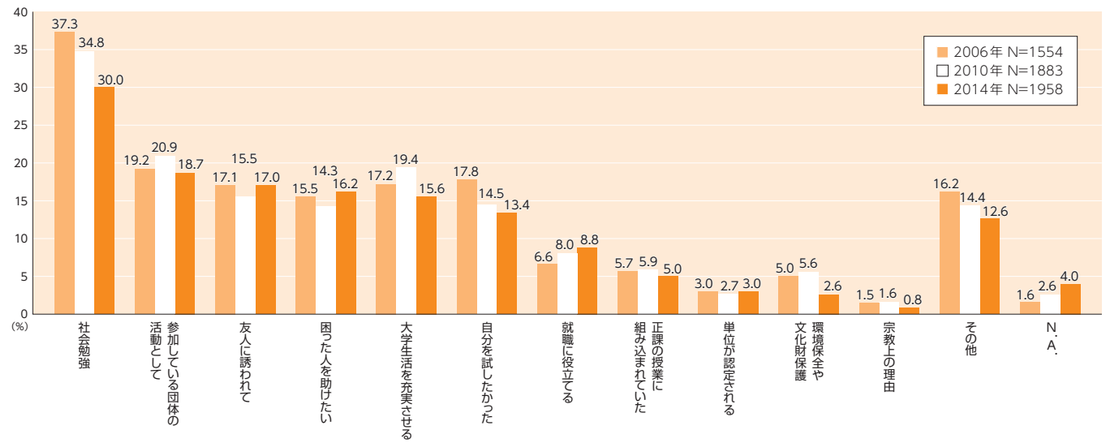
■ボランティア活動の内容――全体と性別比較(降順)



● ボランティア活動に参加する理由

ボランティア活動に参加する理由の上位2つは「社会勉強」(30.0%)と「参加している団体の活動として」(18.7%)で、2010年と同じである。以降の項目には変化が見られ、2010年3位だった「大学生活を充実させる」は3.8ポイント減の15.6%で5位となり、一方2010年7位だった「困った人を助けたい」は1.9ポイント増の16.2%で4位となった。「大学生活を充実させる」や「自分を試したかった」といった自身のための参加は減っている。ただ、「就職に役立てる」が一貫して増えてきており、ボランティア活動の本来の趣旨からすると少しさびしい結果となっている。

■ボランティア活動に参加する理由(降順)



S T U D E N T　L I F E　R E P O R T

Ⅵ章

留学

●留学経験の有無

全体の留学経験率は8.3%で、理系よりも文系の方が経験率は高い。

●留学意向

留学未経験者の３割は留学意向があり、１年生の留学意向が特に高い。

●留学を考えない理由

２人に１人が「留学資金がない」と回答。

コメント

社会のグローバル化を受けて、学生の留学への興味・関心は低くない。しかし実際に大学入学後に留学を経験しているのは全体の8.3%、４年生のみで見ても12.2%と決して高いとはいえない。

留学を阻む要因としては経済面や語学面、外国生活への不安などが挙がる。学生が留学の希望を実現できるように、大学側が解消すべき課題は多い。

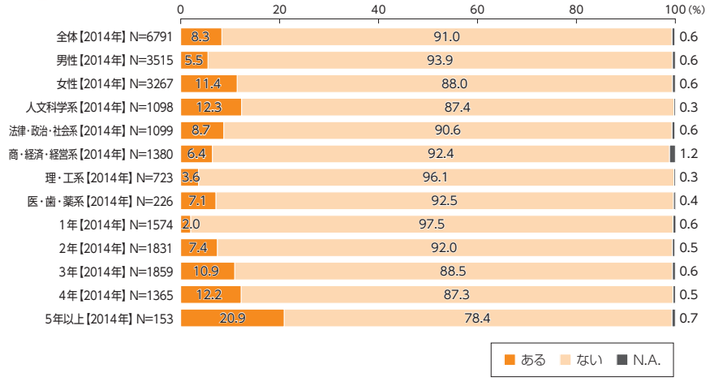
留学経験の有無

全体の留学経験率は8.3%で、理系よりも文系の方が経験率は高い。

留学経験があると回答した者は全体の8.3%であった。女性（11.4%）の方が男性（5.5%）より留学経験率が高く、学部系統別に見ると人文科学系が12.3%と高い。一方で、理・工系は3.6%と低い。

学年別に見ると、当然ではあるが、学年があがるにつれて留学経験者は増える。4年生は12.2%が留学経験があると回答している。

■留学経験の有無



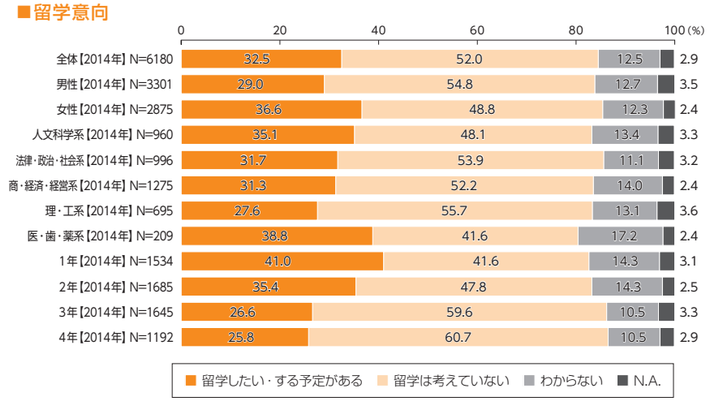
留学意向

留学未経験者の３割は留学意向があり、1年生の留学意向が特に高い。

留学経験のない者に対し、留学意向を尋ねると、全体では32.5%が「留学したい・する予定がある」と答えている。前問の「留学経験あり」と合わせると、全体の約４割は留学を経験、もしくは考えているという結果であった。

属性別に見ると「留学経験あり」と同様、留学意向も女性（36.6%）、人文科学系（35.1%）が高い。その他医・歯・薬系は現時点での留学経験は7.1%と低いものの、将来の留学意向は38.8%と大変高い。また、1年生では留学意向が高いが（41.0%）、学年があがるほど意向は低くなっていく。

■留学意向

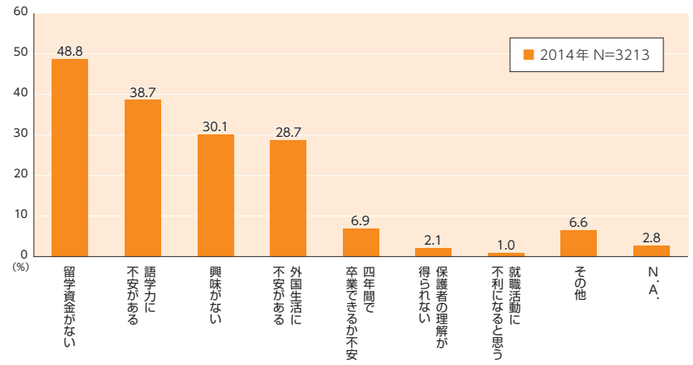


留学を考えない理由

２人に１人が「留学資金がない」と回答。

留学意向のない者について、さらにその理由を複数回答で尋ねたところ、「留学資金がない」が48.8%と半数近くにのぼった。また、「語学力に不安がある」（38.7%）、「外国生活に不安がある」（28.7%）が高くなっている。これらについては各大学での対策が望まれるところである。「興味がない」とする者はここでは30.1%であるが、全体の母数から考えると14.3%に過ぎない。

■留学を考えない理由（降順）



S T U D E N T　L I F E　R E P O R T

Ⅶ章

不安・悩み

●自分のことを何でも話せる友人の有無
自分のことをなんでも話せる友人が「いる」と回答する学生は3回連続で増加。

●相談相手
友人への相談が減少、家族への相談が増加。

●不安・悩みの内容
悩みの内容の1位は「就職や将来の進路」で、1年生でも1位にランクされている。

●ハラスメント〈嫌がらせ〉について
ハラスメントを受けたことのある学生は1割程度。

コメント

不安や悩みがないと回答した学生は若干増えたものの、やはり「就職や将来の進路」の悩みが依然として高く、それは1年生の時から強く感じられている。低学年の段階から社会人としての基礎的な面も含め、一貫してフォローしていくこと、またそれを示すことが不安解消に役立つだろう。

また、1年生は授業などの学業に対する不安・悩みも強い。要望の多い導入教育も含め、適切・十分な対応が必要である。

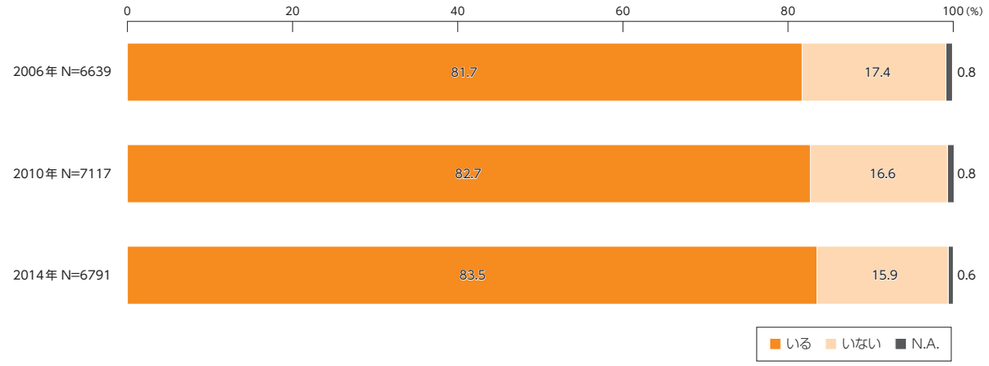
悩みの相談相手の中心は家族や友人であり、大学の教職員や学生相談室を挙げる者は少ない。学生がより充実した学生生活を送るために、大学側が悩みの受け皿として機能する余地がありそうだ。

自分のことを何でも話せる友人の有無

自分のことをなんでも話せる友人が「いる」と回答する学生は3回連続で増加。

自分のことを何でも話せる友人が「いる」者は2014年83.5%であった。この数値は3回連続で増加しており、2010年と比べると0.8ポイント増であった。

■自分のことを何でも話せる友人の有無

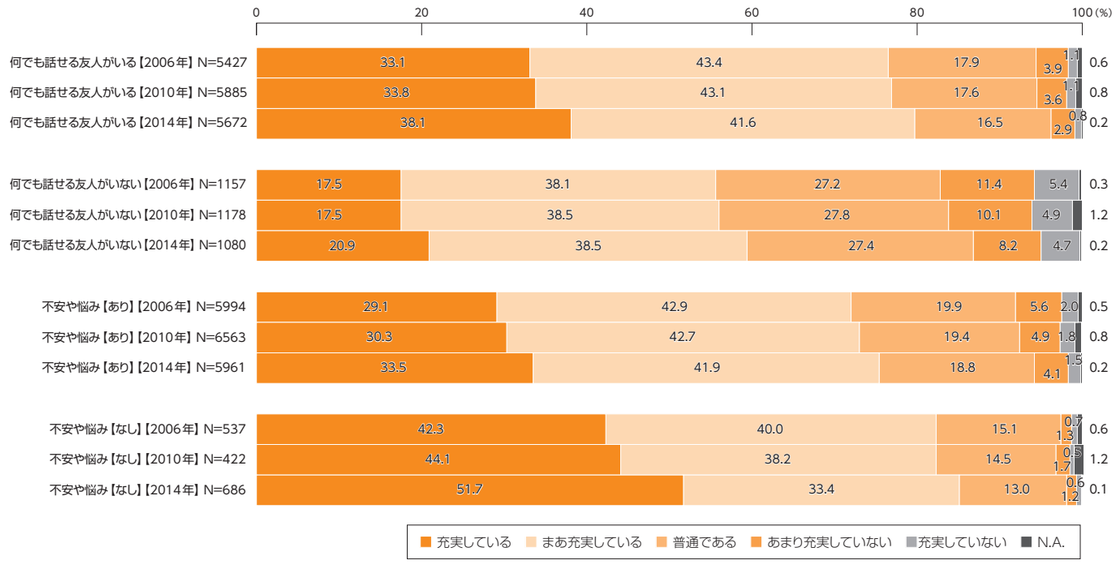


●友人・不安や悩みの有無から見た学生生活充実度

大学に入ってよかったことの1位は「友人を得たこと」であった(P.11)。「何でも話せる友人がいる」者は、38.1%が学生生活が「充実している」と答えた。しかし、「何でも話せる友人がいない」者は、学生生活が「充実している」と答えたのは、わずか20.9%と17.2ポイントの差がある。

同様に「不安や悩みがない」者は51.7%が学生生活が「充実している」と答えたのに対して、「不安や悩みがある」者で学生生活が「充実している」と答えた者は33.5%と18.2ポイントもの差があった。

■学生生活の充実度



不安・悩みの内容

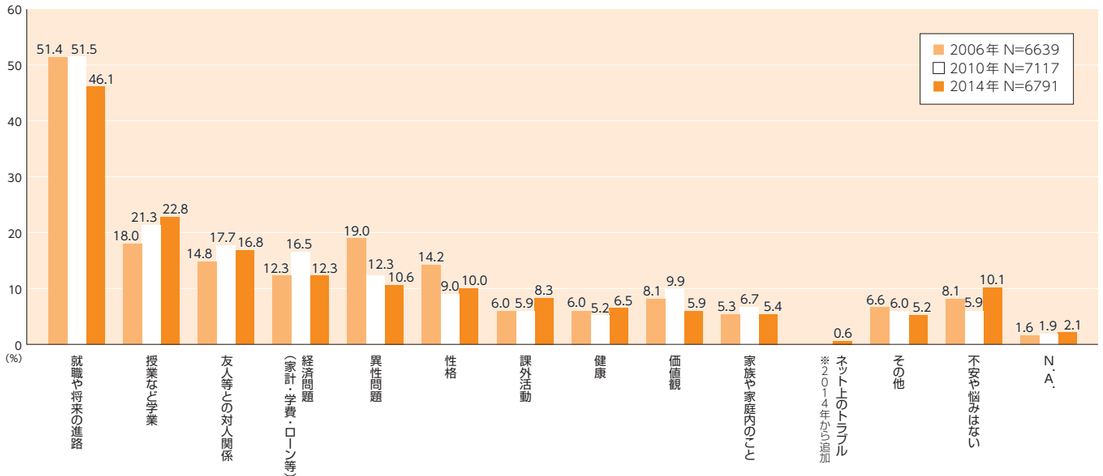
悩みの内容の1位は「就職や将来の進路」で、1年生でも1位にランクされている。

● 全体

「不安や悩みがない」と答えた者は全体の10.1%に過ぎず、9割の者は何らかの不安・悩みを抱えていることになる。最も多い不安・悩みは「就職や将来の進路」であり、46.1%を占めている。次に多いのは「授業など学業」で22.8%、以下は「友人等との対人関係」(16.8%)、「経済問題」(12.3%)と続く。

属性別に見ると、「授業など学業」を悩みとする者は理・工系(30.0%)、医・歯・薬系(46.9%)の割合が高い。「就職や将来の進路」を悩みとする者は就職活動を目前に控えた3年生が63.2%と高くなっている。その他にも「5年生以上」(54.9%)、「人文科学系」(53.6%)、「女子大」(52.6%)、「留学したことがある」(53.8%)層で「就職や将来の進路」について悩む者の割合が高い。

■不安・悩みの内容――全体(降順)

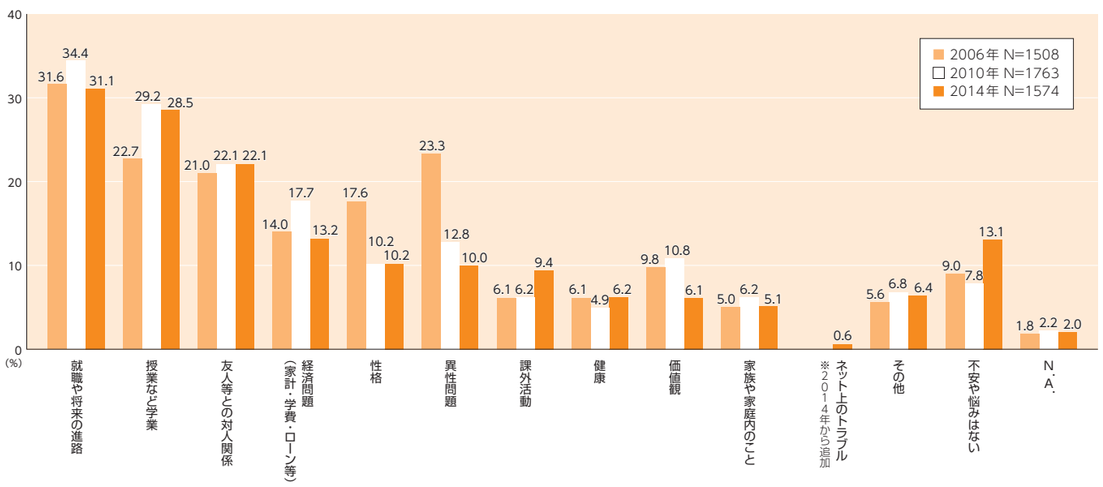


●1年生

入学間もない1年生も不安や悩みを抱えている者が9割近くにのぼる。「就職や将来の進路」は31.1%と全学年平均よりは低いものの、1位となっている。1年生10月時点でもインターンシップに「すでに参加した」+「ぜひ参加したい」が2割いたことも、このことが背景となっていると推察される。

「就職や将来の進路」に関しては2010年から3.3ポイント減少している。これは全体の動きと同様である。「友人等との対人関係」に関しては2010年と変わらず、「経済問題」は4.5ポイント減少した。「異性問題」に関しては2006年より一貫して減少傾向である。また、まだ学生生活が安定していないためか、全体平均と比べて「授業など学業」(1年生28.5%、全体22.8%)や「友人等との対人関係」(1年生22.1%、全体16.8%)が相対的に高くなっている。

■不安・悩みの内容――1年生(降順)



相談相手

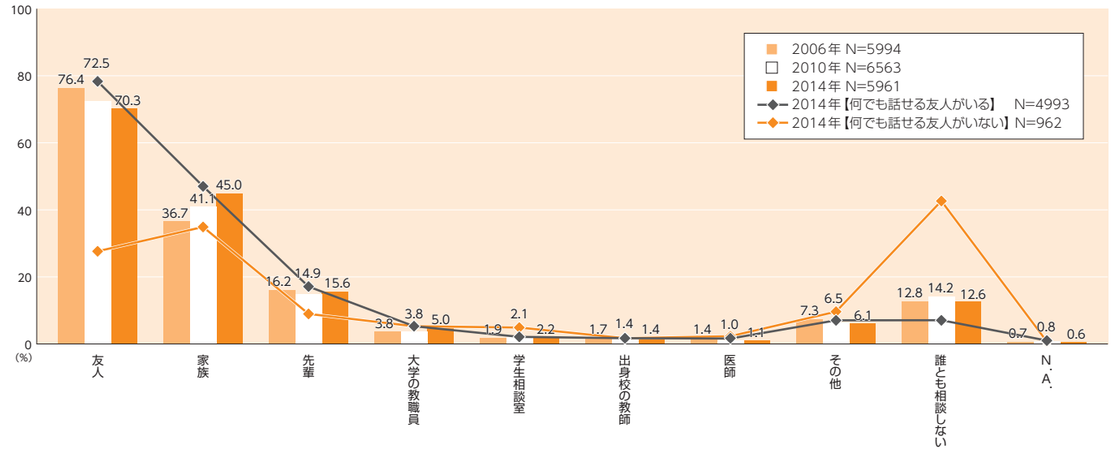
友人への相談が減少、家族への相談が増加。

不安・悩みの主な相談相手の1位は「友人」で70.3%、次に「家族」が45%と続き、その他は16%以下となる。「大学の教職員」は5.0%、「学生相談室」は2.2%と低くなっている。不安・悩みとして就職や将来、学業が多く挙がるものの(P.39)、相談相手として大学が活用されておらず、改善の余地が見られる。

経年で見ると、「友人」は減少し(2006年76.4%→2014年70.3%)、「家族」が増加(2006年36.7%→2014年45.0%)している。

属性別に見ると「家族」に相談する者は女性に多く(女性50.6%、男性39.8%)、必然的に女子大学では「家族」に相談する者が54.8%と多くなる。また、「何でも話せる友人がいる」者は「友人」に相談する者が78.5%と高い。一方「何でも話せる友人がいない」者は、相談相手として「家族」「友人」「先輩」を挙げるものがそれぞれ34.8%、27.5%、8.7%と少なく、「誰とも相談しない」者が42.6%を占め、ひとりで不安・悩みを抱えている姿が浮かびあがる。

■不安・悩みの相談相手――全体と何でも話せる友人の有無(降順)



ハラスメント〈嫌がらせ〉について

ハラスメントを受けたことのある学生は1割程度。

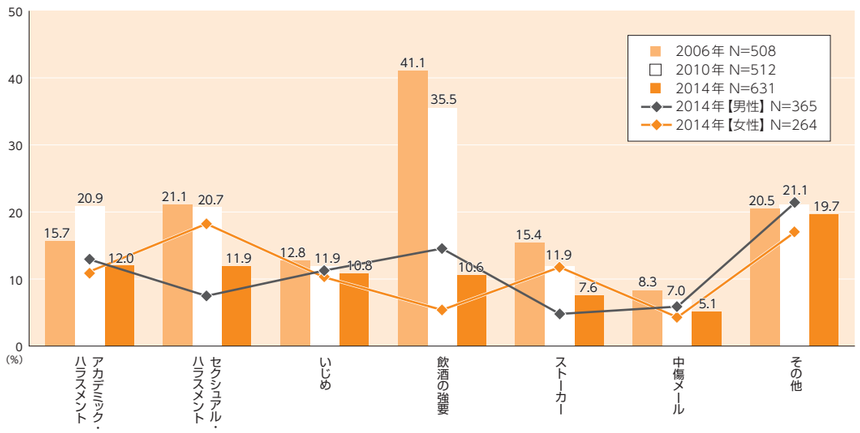
「ハラスメントを受けたことがない」者は、2006年84.5%、2010年86.7%、2014年89.9%と増加している。男女とも2010年に比べて「受けたことがない」者が増えている(男性84.9%→88.9%、女性88.8%→91.2%)。

ハラスメントの内容としては、「アカデミック・ハラスメント」(12.0%)、「セクシュアル・ハラスメント」(11.9%)、「いじめ」(10.8%)、「飲酒の強要」(10.6%)の順となった。2010年にハラスメントの内容として1位だった「飲酒の強要」は24.9ポイント減少し、4位となっている。

男女別で見ると、男性では「飲酒の強要」(14.5%)、女性では「セクシュアル・ハラスメント」(18.2%)が最も多い。

受けたことがない(%)	
全　体	
2006	84.5
2010	86.7
2014	89.9
男　性	
2006	82.7
2010	84.9
2014	88.9
女　性	
2006	86.8
2010	88.8
2014	91.2

■ハラスメント〈嫌がらせ〉の内容(降順)



Ⅷ章

進路・就職

●就職への不安

1位は2010年と変わらず「就職できるかどうか」であるが、9.4ポイントの減少。

●どんな民間企業を志望するか

上位3項目（安定している・能力を活かせる・給与が高い）は変動なし。

●希望する進路

2010年と同様に学年があがるにつれて「公務員」希望は減少し、「民間企業・団体」希望が増加。

コメント

就職に関して、薄明かりが見え出した状況ではあるが、やはり自分の希望する就職先に就職できるかも含め、「就職できるかどうか」という不安は高い水準を維持している。

「自分の適性にあった職業を選べるか」、「就職すること自体」もIT化やグローバル化、産業構造の変革の動きが喧伝される中、相変わらずの高さとなっている。

社会人という今までとは全く異なる環境に移ることへの不安は絶えない。4年生では人間関係や社会人としての拘束など社会に入ってからの不安が相対的に高い。進路選択、就職活動へのサポートは当然必要だが、就職が決まった者に対し、社会に自信を持って羽ばたけるよう、きめ細かいサポートも求められているだろう。

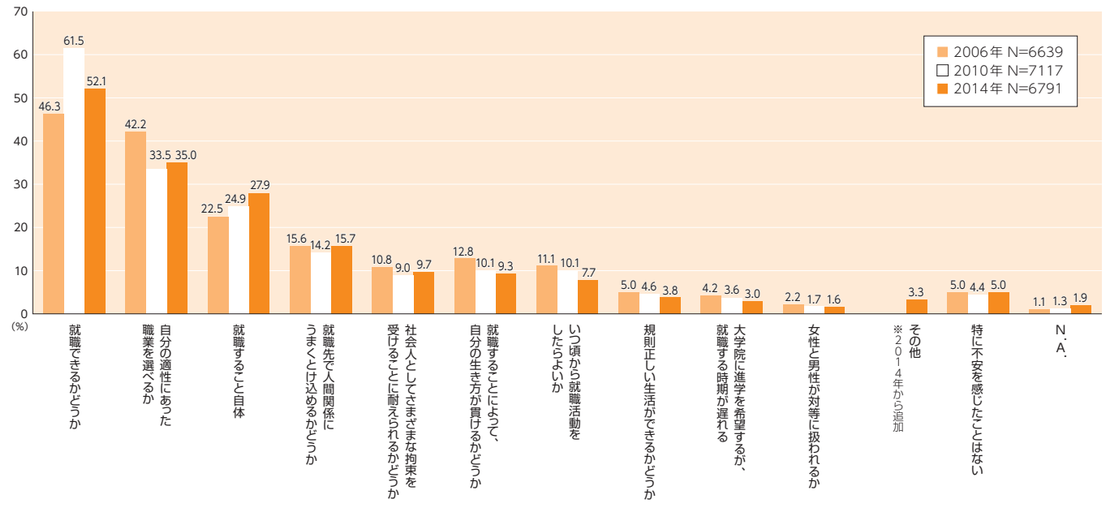
就職への不安

1位は2010年と変わらず「就職できるかどうか」であるが、9.4ポイントの減少。

● 全体

上位3項目の順位は2010年と同じであったが、1位の「就職できるかどうか」については2010年より9.4ポイント減少した。2位の「自分の適性にあった職業を選べるか」は2010年とほぼ同じ、3位の「就職すること自体」は2006年より連続して増加し、27.9%と4分の1以上の者が就職自体を不安に感じているという結果であった。

■就職への不安――全体（降順）

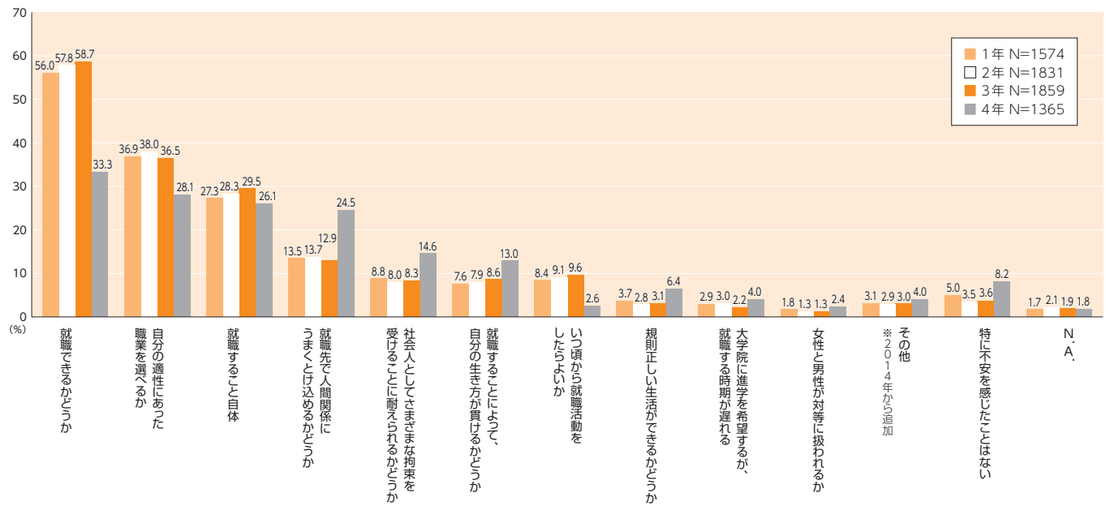


● 学年別

学年別で見ると、2年生、3年生では「就職できるかどうか」がそれぞれ57.8%、58.7%と高いが、4年生10月時点では「就職できるかどうか」は33.3%と減少し、「就職先で人間関係にうまくとけ込めるかどうか」という、就職後のことに関する不安が強くなっていることが分かる。

グラフにはないが性別・学部系統別の差は少なく、医・歯・薬系では就職に対する不安を感じる学生の割合が少ないことが目立った。

■就職への不安――学年別比較



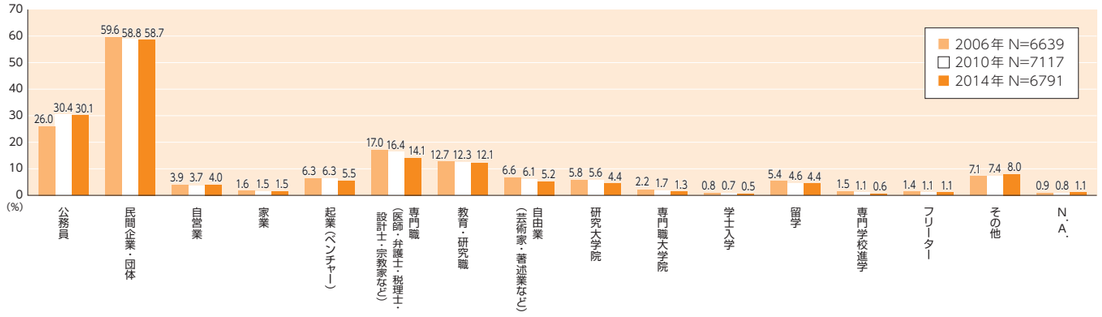
希望する進路

2010年と同様に学年があがるにつれて「公務員」希望は減少し、「民間企業・団体」希望が増加。

● 全体

希望進路は1位「民間企業・団体」(58.7%)、2位「公務員」(30.1%)、3位「専門職」(14.1%)であり、過去2回から順位に変動はないが、「専門職」希望については2006年から微減(2006年17.0%→2010年16.4%→2014年14.1%)を続けている。

■希望する進路――全体

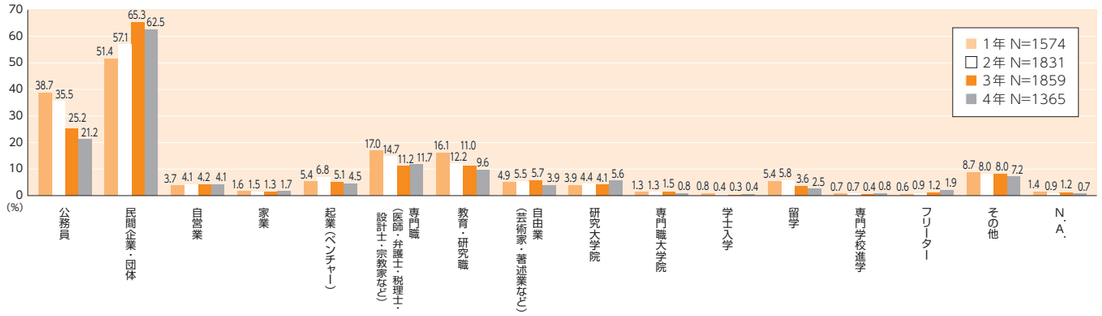


● 学年別

学年別では2010年と同様の傾向を示している。1年生は「公務員」への希望が38.7%と多いが、学年があがるほど希望者割合が減少し、4年生では21.2%となる。それほどの落差はないが、「教育・研究職」も同様に、学年があがるにつれ、希望が減少する傾向にある。

「民間企業・団体」希望を見てみると、1年生では51.4%であるが、4年生では62.5%と増加している。

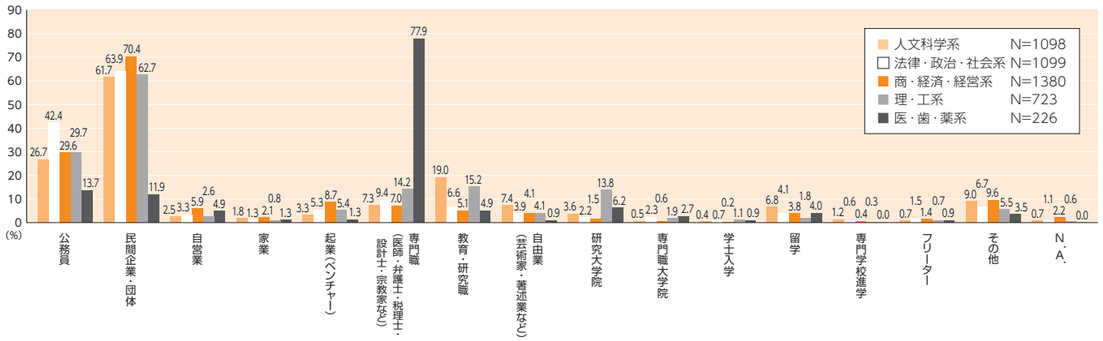
■希望する進路――学年別比較



● 学部系統別

学部系統別で見ると、それぞれ学問領域によって特徴が出ているのがわかる。人文科学系では「教育・研究職」希望(19.0%)が、法律・政治・社会系では「公務員」希望(42.4%)が、商・経済・経営系では「民間企業・団体」希望(70.4%)が、理・工系では「研究大学院」希望(13.8%)が、医・歯・薬系では「専門職」希望(77.9%)がそれぞれ多い。

■希望する進路――学部系統別比較



どんな民間企業を志望するか

上位3項目(安定している・能力を活かせる・給与が高い)は変動なし。

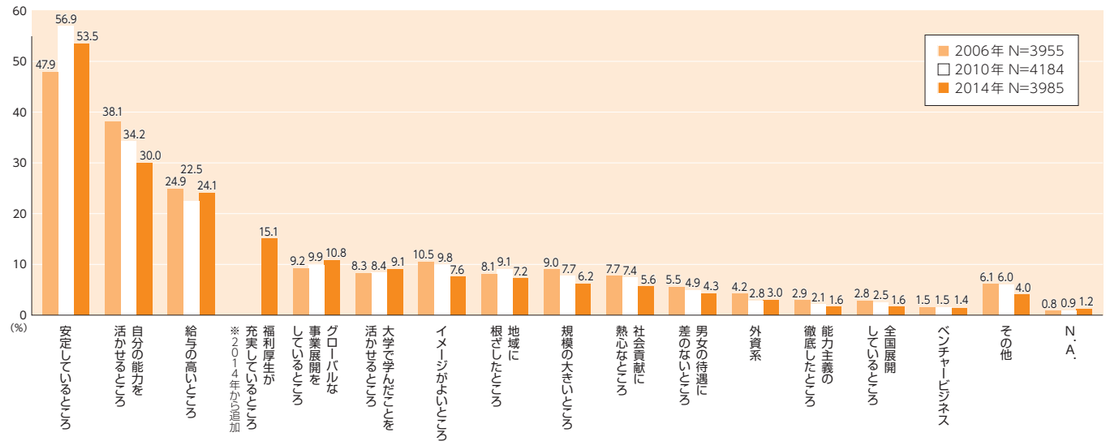
上位3項目の順位に変動はなかったが、2010年と比べ1位の「安定しているところ」は3.4ポイント、2位の「自分の能力を活かせるところ」は4.2ポイントの減となった。

今回新たに設置した「福利厚生が充実しているところ」は15.1%と4位であった。福利厚生に関しては、女性(17.4%)が男性(12.9%)よりも重視している傾向にあるが、他の属性では差はあまり見られず、1位の「安定しているところ」同様、普遍的に求められているものの1つともいえるのではないか。

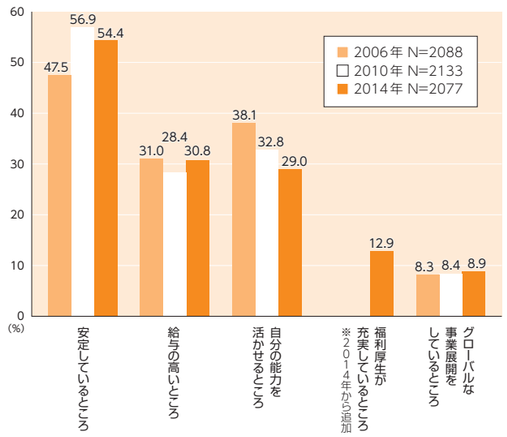
「給与の高いところ」という項目では属性間の差があるものが多く、男性(30.8%)が女性(16.7%)より高く、医・歯・薬系(48.1%)は他の学部よりかなり高い。

グローバル時代と言われる中で、「グローバルな事業展開をしているところ」については、5位に入っており漸増傾向にあるものの、割合としては1割程度である。また、「外資系」は3.0%にとどまっている。

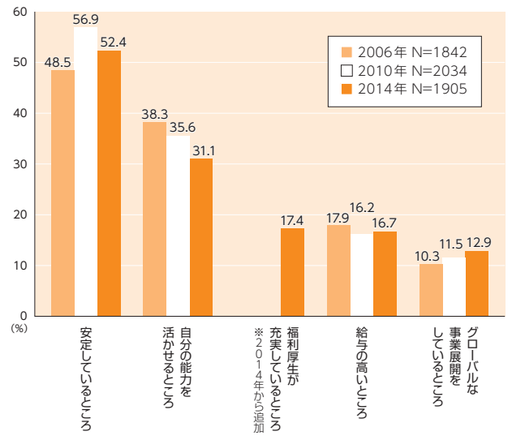
■志望する民間企業・団体――全体(降順)



■志望する民間企業・団体――男性(降順)



■志望する民間企業・団体――女性(降順)



S T U D E N T　L I F E　R E P O R T

Ⅸ章

身についたこと

●大学生活でこれまで身についたと実感できる力

多くの能力について、学年があがるにつれて「身についた」と感じる割合が高くなる。

●今後、大学生活で身につけたい力

「外国語の本を読んだり、外国語で話をする力」は、4年生でも今後身につけたい力として上位。

コメント

2010年同様、語学力を除いて各項目とも学年があがるごとに「身についた」と評価する者が多くなっており、学生生活の成長の跡がうかがえる。語学力についてはその必要性が感じられてはいるものの、4年間を通じての能力向上は横ばい、または低下という結果であった。大学側の対応が求められる。

また、4年生時点では48.7%が「自分の考えをまとめて分かりやすく表現する力」を得たいとしており、「計画を立て、目標に向かってリーダーシップをとる力」、「専門的知識をもとに論理的に考える力」も高くなっている。スムーズな社会生活への移行のためにも対応の検討が求められるところである。

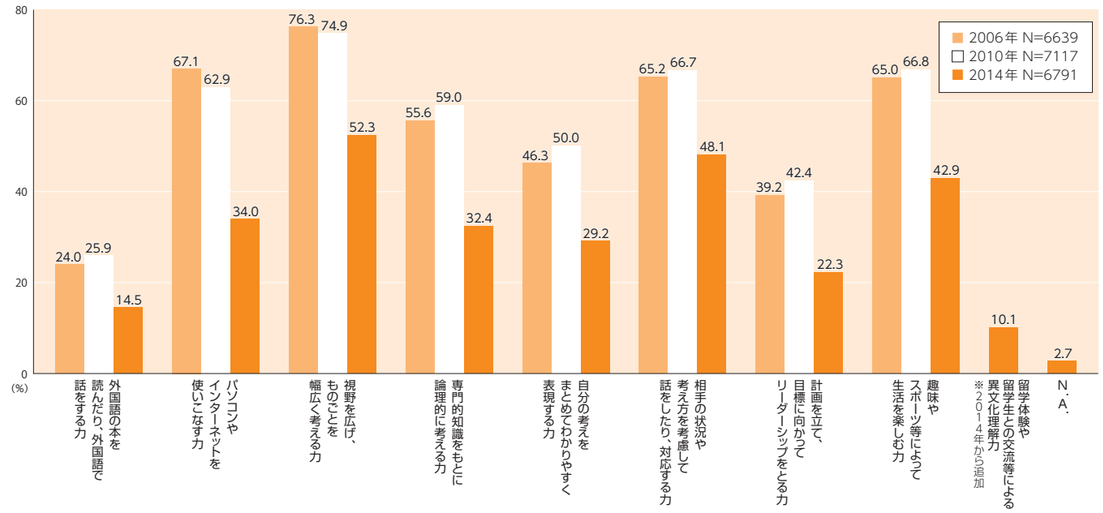
大学生活でこれまで身についたと実感できる力

多くの能力について、学年があがるにつれて「身についた」と感じる割合が高くなる。

● 全体

2014年とそれ以前は回答形式が異なるため、各項目の数値は大きくさがっているが、2014年は1位が「視野を広げ、ものごとを幅広く考える力」、2位が「相手の状況や考え方を考慮して話をしたり、対応する力」、3位「趣味やスポーツ等によって生活を楽しむ力」であり、2010年と比べて2位と3位の項目が入れ替わったのみで、他の項目については順位に変動がなかった。

■身についたと実感できる力――全体

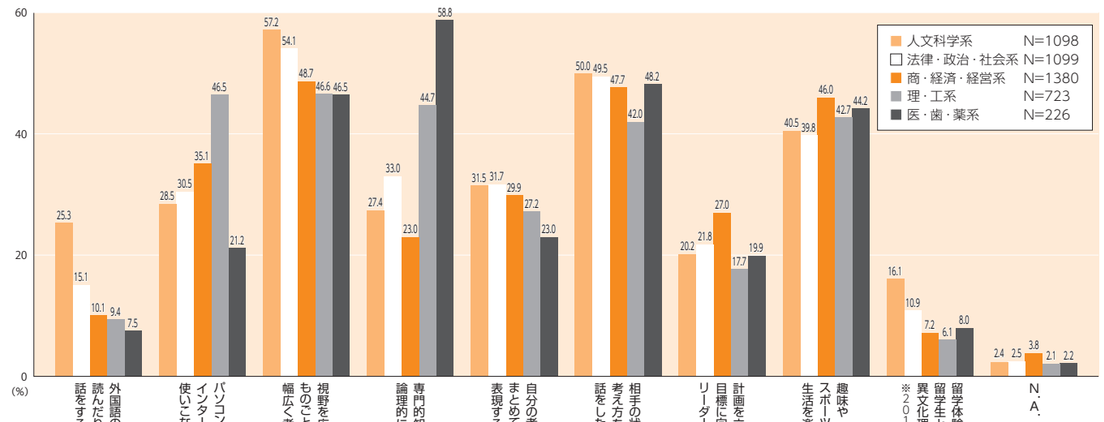


● 学部系統別

学部系統別でみると人文科学系では「外国語の本を読んだり、外国語で話をする力」(25.3%)、「留学体験や留学生との交流等による異文化理解力」(16.1%)が他の系統よりも高く、理・工系では「パソコンやインターネットを使いこなす力」(46.5%)、「専門的知識をもとに論理的に考える力」(44.7%)が高くなっている。

医・歯・薬系では「専門的知識をもとに論理的に考える力」(58.8%)が大変高くなる一方で、「外国語の本を読んだり、外国語で話をする力」(7.5%)、「パソコンやインターネットを使いこなす力」(21.2%)に対する実感が他の学部と比べて低くなっている。

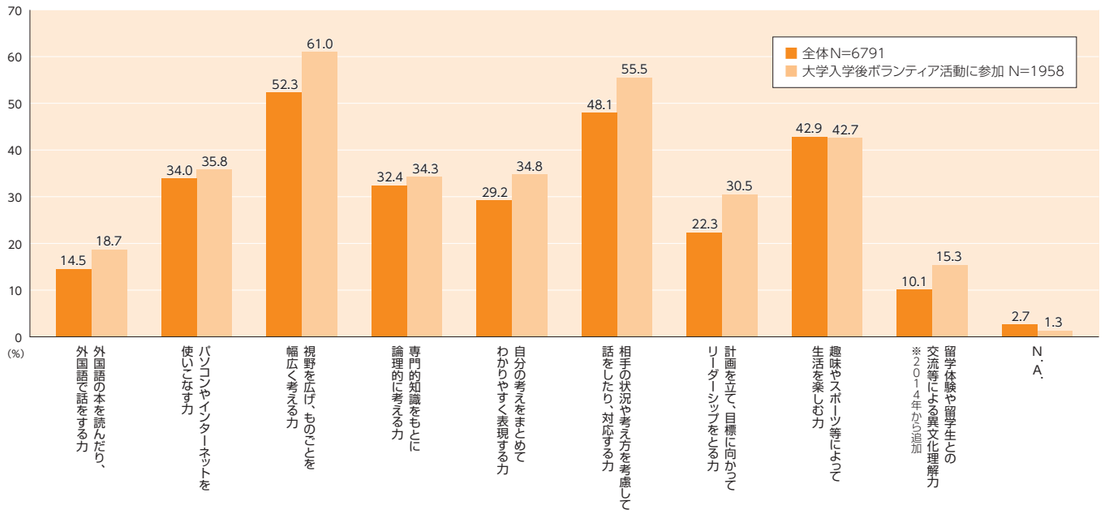
■身についたと実感できる力――学部系統別比較



● 全体とボランティア活動経験層

大学入学後にボランティア活動に参加したことのある層について見ると、「視野を広げ、ものごとを幅広く考える力」「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」「相手の状況や考え方を考慮して話をしたり、対応する力」「計画を立て、目標に向かってリーダーシップをとる力」「留学体験や留学生との交流等による異文化理解力」について、全体より5ポイント以上高いことが見てとれる。学生の感覚に基づく回答ではあるが、ボランティア活動に参加することが、こうした力を身につけるのに一定の効果があると推測することができる。

■身についたと実感できる力――全体とボランティア活動経験層比較

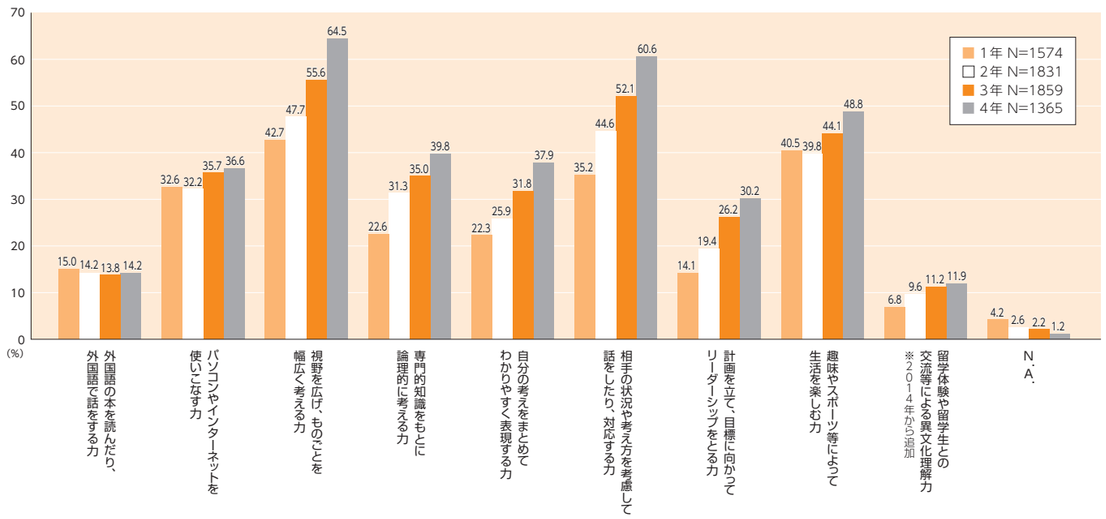


● 学年別

1年生と4年生を比較すると、ほぼ全ての項目で「身についた」と実感している割合が伸びている。なかでも、「相手の状況や考え方を考慮して話をしたり、対応する力」(25.4ポイント増)、「視野を広げ、ものごとを幅広く考える力」(21.8ポイント増)の伸びが目立つ。次いで、「専門的知識をもとに論理的に考える力」、「計画を立て、目標に向かってリーダーシップをとる力」の伸びも大きい。

唯一、1年生よりも割合が低くなっているのが「外国語の本を読んだり、外国語で話をする力」(0.8ポイント減)であり、大学における語学教育のあり方に改善の余地があることがうかがえる。

■身についたと実感できる力――学年別比較



今後、大学生活で身につけたい力

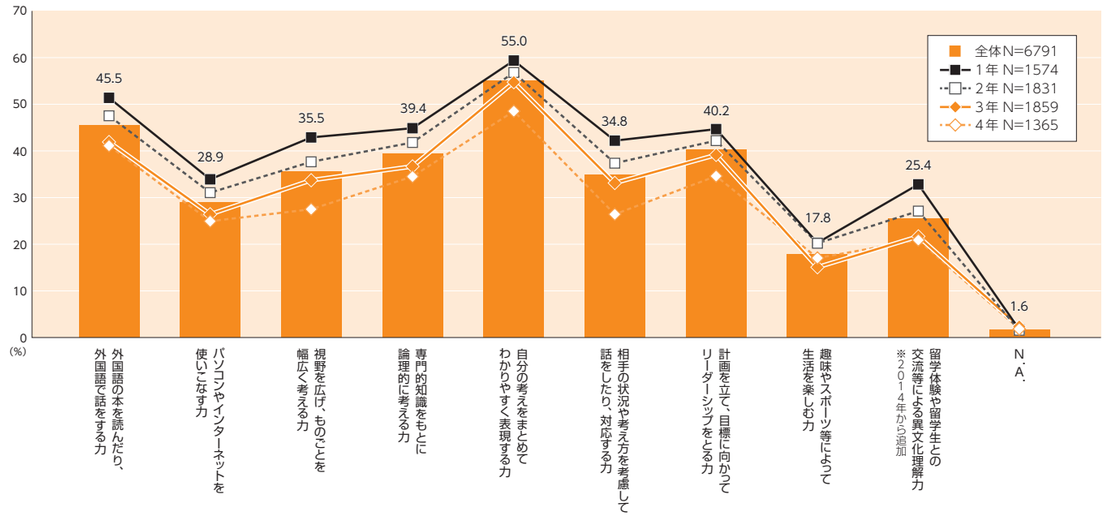
「外国語の本を読んだり、外国語で話をする力」は、4年生でも今後身につけたい力として上位。

身につけたい力は「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」という、いわばプレゼンテーション能力を求める者が全体で55.0%と高い。「外国語の本を読んだり、外国語で話をする力」が45.5%と2位である。4年生時点でもこの能力を必要とする者は41.2%であり、社会のグローバル化を反映した結果となっている。

以下は、「計画を立て、目標に向かってリーダーシップをとる力」(40.2%)、「専門的知識をもとに論理的に考える力」(39.4%)と続く。

男女別では差は少ないが、学年別では全項目にわたり、1年生が最も高く、力が身についたと判断しているためか、学年があがるごとに低下していくという傾向がある。1年生と4年生を比べると4年生で軒並み10ポイント程度の低下となり、「視野を広げ、ものごとを幅広く考える力」、「相手の状況や考え方を考慮して話をしたり、対応する力」は15ポイント程度下がっている。この2項目は4年生の60%以上が「身についた」としている。

■身につけたい力――全体と学年別比較



委員名簿

■学生委員会 委員

役名	氏名	大学名および役職等名
担当理事	吉岡知哉	立教学院　立教大学総長
委員長	國廣敏文	立命館　理事・産業社会学部教授
副委員長	伊東裕司	慶應義塾　学生総合センター長・文学部教授
委員	中川恭明	中央大学　学生部長・総合政策学部教授
	川崎友巳	同志社　学生支援機構学生支援センター所長・法学部教授
	小野寺一浩	福岡大学　学生部長・法学部教授
	神澤信行	上智学院　学生センター長・理工学部教授
	宇惠勝也	関西大学　キャリアセンター所長・商学部教授
	米山直樹	関西学院　学生活動支援機構副機構長（学生部長）・文学部教授
	岡本大輔	慶應義塾　就職部長・商学部教授
	杉林宏茂	明治大学　学生支援部長
	北條英勝	武蔵野大学　学生部長・人間科学部教授
	石垣智徳	南山学園　就職委員会委員長・ビジネス研究科教授
	坂本雅士	立教学院　学生部長・経済学部教授
	齊藤泰治	早稲田大学　学生部長・政治経済学術院教授

■学生委員会 学生生活実態調査分科会 委員

役名	氏名	大学名および役職等名
分科会長	北條英勝	武蔵野大学　学生部長・人間科学部教授
委員	平山令二	中央大学　法学部教授
	今尾　真	明治学院　学生部長・法学部教授
	桂　良太郎	立命館　学生部副部長・国際関係学部教授
	阿藤正道	専修大学　学生部長・商学部教授
	岩崎日出男	園田学園　教学支援部長・人間健康学部教授

■担当事務局 教学支援担当

役名	氏名	
担当課長	相坂太郎	
担当課長代理	阿部晴美	
担当課員	千葉謙太	
専門職	高橋真穂	（2015.4～2016.3日本大学より出向）

一般社団法人日本私立大学連盟加盟大学一覧

（平成27年9月現在　121大学　大学名ABC順）

愛知大学
亜細亜大学
青山学院大学
跡見学園女子大学
梅花女子大学
文教大学
筑紫女学園大学
中京大学
中央大学
獨協大学
獨協医科大学
同志社大学
同志社女子大学
フェリス女学院大学
福岡大学
福岡女学院大学
福岡女学院看護大学
学習院大学
学習院女子大学
白鷗大学
阪南大学
姫路獨協大学
広島女学院大学
広島修道大学
法政大学
兵庫医科大学
兵庫医療大学
石巻専修大学
実践女子大学
上智大学
城西大学
城西国際大学
順天堂大学
関西大学
関西学院大学
関東学園大学
関東学院大学
慶應義塾大学
恵泉女学園大学
敬和学園大学
神戸女学院大学
神戸海星女子学院大学
國學院大学
国際大学（※）
国際武道大学
国際基督教大学
駒澤大学
皇學館大学
甲南大学
久留米大学
共立女子大学
京都産業大学
京都精華大学
京都橘大学
松山大学
松山東雲女子大学
明治大学
明治学院大学
宮城学院女子大学
桃山学院大学
武蔵大学
武蔵野大学
武蔵野美術大学
名古屋学院大学
南山大学
日本大学
日本女子大学
ノートルダム清心女子大学
大阪学院大学
大阪医科大学
大阪女学院大学
追手門学院大学
大谷大学
立教大学
立正大学
立命館大学
立命館アジア太平洋大学
龍谷大学
流通科学大学
流通経済大学
西武文理大学
聖学院大学
成城大学
聖カタリナ大学
成蹊大学
西南学院大学
清泉女子大学
聖心女子大学
仙台白百合女子大学
専修大学
芝浦工業大学
白百合女子大学
昭和女子大学
園田学園女子大学
創価大学
大正大学
拓殖大学
天理大学
東邦大学
東北学院大学
東北公益文科大学
東海大学
常磐大学
東京医療保健大学
東京情報大学
東京女子大学
東京女子医科大学
東京経済大学
東京農業大学
東京歯科大学
苫小牧駒澤大学
東洋大学
東洋英和女学院大学
東洋学園大学
豊田工業大学
津田塾大学
和光大学
早稲田大学
山梨英和大学
四日市大学
四日市看護医療大学

（※）国際大学は学部を設置していないため、調査対象となっておりません。